
魔眼の使徒

VATA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔眼の使徒

【Nコード】

N1363V

【作者名】

VATA

【あらすじ】

神界 魔界との邂逅により魔法を役する（魔眼）保持者が世界に溢れ やがて大きな争いに発展する。

戦後 理想の世界を実現する為に作られた 学園都市ユグドラシルを舞台に 自らの存在を掴み取るために運命に立ち向かう 少年少女たちの物語

処女作なのでマイペースでの投稿になります。文章表現にボリュームをつけるため 頻繁に改訂します。

〈序章〉キオク

記憶

過去の事は今ではよく思い出せない・・・いや思い出したくない。自己防衛とも思える本能的な考えは 過去の記憶に霞がかったように曖昧にしていた。

それは自分にとって最も苦しい記憶 最も悲しい記憶 最も辛い記憶・・・判っていた。

それを言い訳にして 過去からずっと逃げていることを。そして逃げられない事も。

しかし 今の自分では過去と向き合うことが出来ないでいる。・・・そう 私はまだ弱い存在だ。

だから 過去を振り返らない・・・いえ 振り返れない・・・そうやって逃げ続けている。

それでも・・・今でも夢に見る事がある・・・

あの暗い闇夜 私以外誰もいない部屋 人払いの結界
鏡に映る自分 手に握られたカッターナイフ 意思の籠った（眼）
苦痛から逃げ出す為に、強く強く決意した夜。

カッターを持つ手が震える。いつも使っている黄色いカッターだ
まさかこんな事に使うなんて夢にも思わなかった。震える右手に左手を重ね 恐怖を押し込めようと力を込める。深く息を吐くと更に力を込めた。

その手がゆっくりと顔に近づいてゆく……

（怖い…怖い…でも…）

それ以上に私は自分のこの「眼」が嫌い！！だから…だから…決意したんじゃないかっ！

固く眼を閉じる…この手を後5cm…押し出せば…私は…私は変われるのだろうか？

あの辛く苦しい毎日と決別出来るのだろうか？そしていつも思い描いていた日常を手に入れる事ができるのだろうか？

「………？」

違和感を感じて そっと頬に触れた。指には濡れた感触……涙・

・

？いつの間にか私は泣いていた……

ただ……静かに……

（何故泣いているのだろうか？この眼に愛着が？）

それは無い 私はすぐにその思考を否定した。

「ああ…そうか…」

それは産んでくれた両親に対する罪悪感…こんな私をここまで愛してくれた事への感謝…両親だけは私がこの苦難を乗り越えられると信じていてくれた。……この行為は その両親の思いを踏みにじる裏切りとも呼べる行為だ。そう考えると 涙が止まらなくなった。

（今なら……まだ……）

あれほど悩んだ筈なのに今更……

どれだけ泣いただろうか？不思議と心は穏やかだった…再び眼を閉じる……

その決意は固かった。再び眼前にカッターを構え眼を閉じた・・・
もう 手は震えていなかった……

「駄目だよ」

瞬間手首を掴まれた。眼を見開くと隣には、見ず知らずの男の子がいた

「…あなた……誰っ?!」

この部屋には誰も居なかった……いや入れる筈がない!! 人払いの結果は強力だ・・・ましてやドアには三重結界があったはずだが?!

「駄目だよ」

彼のその言葉に様々な思考が吹き飛んだ。いま私は他人と対峙している・・・この（眼）で!!

再び恐怖が沸き上がる。足が震えている…思考を維持出来ない…! この「眼」を見られている! 私にとって一番の恐怖を感じる瞬間だった。部屋全体が揺らぐ・・・不安定な心が結界を不安定にしていた。その様子を見た彼は手をずっと振り上げた 途端に室内は安定する。

く二重結界く結界内に同質の結界を張る 高度な技術だ。

それを確かめた彼は彼女に向き直る。相変わらず彼女は怯えた表情でこちらを見ていた。

その瞳は……………

「綺麗だね」

私の瞳を見据えたまま彼はそう言った。彼女は一瞬何を言われたか理解出来なかった。

そう言われたのは……初めてだった。その言葉は彼女を傷付けるものではなく

忌み嫌うものでもなかった。彼自身の素直な感想そのものだった。

「凄く…綺麗だ」

もう一度そう言った。自分の存在を初めて認められた気がした。

その感情は胸の奥に渦巻き やがて溢れだす。押し寄せる感情は彼女の決意を打ち碎き 押し止めた感情が涙となって溢れ出た。

私はただ 彼にすがり声を上げて泣いた。怒り 悲しみ 全てを大粒の涙が押し流した。

恐怖ではない 悲哀でもない これは歓喜の涙なのだ

「それは君だけの瞳」

落ち着いた私に彼はそう告げた。幼子を諭す様に。

大切な事を優しく そして強く 語りかけた。

「そして君だけの力」

優しく手を重ねた。

その温もりが彼の言葉の意味を私に理解させる。

「でも……」

彼は手をそつと離すと 私の目を真っ直ぐに見つめた。その言葉の先をただ静かに待った。

「その瞳が君を苦しめているなら…助けてあげるよ」
「本当?!」

思いもよらぬその言葉に反応してしまう…そんな彼女の反応に彼は微笑んだ。

「じゃあ…君の……を……に……」

風景がぼやける…記憶はいつも此処で終わる。

ハジマリノウタ1

「あ」

目覚めた私の目の前にはイリュのまぬけた顔があった。

ちらりと壁の時計を見る。6時30分 今日もぴったりの時間だ。
再び視線をイリュに戻す。

「…何してるの？」

「あははっ…その…紫音があまりに可愛いからつい…（＜艸＞＊）」

ベットに眠る私の上に四つん這いになっているイリュ…第三者が見ればあらぬ誤解を受けることは間違いなさそうだ。………それはとても困るのだけど。枕元からベッドが悲鳴にもいた軋み声をあげた…小さなころから使い続けているこのベッドも良くがんばってくれている……

「いや…私はノーマルだから…」

そう言い放つと 彼女の横をすり抜けてお気に入りの水色のカーテンを開けた。既に日が昇り明るい日差しが部屋一杯に広がった。
5月の日差しが心地良い朝を告げていた。

「…相変わらず勘が良いなあ…今日こそ紫音の唇を頂けると………ちっ！」

「…だから…私はノーマルなんだってば…」

別にイリュが百合っ子な訳でもない。かと言って 本気で唇を狙っている訳でもない………多分。

毎朝こんな感じで彼女は私のアパートに侵入してくる。まあ　せがまれて合鍵を渡したのは私なんだけど

「紫音は一人で住んでて寂しくない？」

急にイリュが呟いた。この後の話の展開がなんとなく読めてしまう・・・詳しくは聞いてはいないが・・・どうやら私を自分の住む寮に誘いたいらしい。こう毎日のように誘い続ける彼女は将来　やりの販売員になれるのだろうか・・・と感心してしまうほどだった。深いため息をついてから彼女に向き直る。

「またその話？　いいの私は一人でも大丈夫」

でもそれは嘘だ本当は寂しい癖に他人との交流が怖いだけ。彼女の寮にも勿論興味はある、それ以外にもやりたい事は山のようにある。あるのだが…人目を気にする余り自分を出せないでいた。そんな感情をさとられないようにクローゼットに向かう。イリュの事を親友！・・・と思いながらも自分をさらけ出せないで居る自分が心底嫌になる・・・

「…私だったら一人なんて考えられないけどね」

イリュの性格上確かに…と納得してしまった。彼女の周りには常に誰かが居た。それは彼女の性格も成せる業だろうか・・・世間で言うところのカリスマ性と言うやつだろうか？　人を引き寄せるなにかがあるのだろうか・・・自分にそんな部分が無いだけに　彼女が一際輝いて見えてしまう・・・こんな自分も彼女の魅力に引き込まれた一人なのだろうか・・・

「……私は…大丈夫…」

そう呟く：まるで自分に言いきかせるように。大丈夫・・・大丈夫・・・やがてその言葉は自分の波打つ心を鎮めていった。

「なんだか：紫音は無理してるみたい」

イリュがベッドの上に仰向けに寝転んだ。私の白いベッドカバーに彼女の深紅の髪が映えて、そのしなやかな肢体は見るものを引き付ける。私が男性なら間違はなく、ベッドに向かって飛び込んでいただろう・・・いやいや、私も百合っ娘では無いから！

「…そんな事ないよ」

勘が良いのはどっちだよ！と、思わず突っ込みを入れてしまいそうになった。その反面いかに彼女が私を見ているのか・・・少し嬉しくもあった。

「……ふうん」

私の応えを聞きながら、ベッドの上で妖艶な笑みを浮かべる。クラスメートとは思えない位色っぽいんですけど……何だか同い年に思えないなあ・・・彼女は子供っぽい性格をしてはいるが、時折鋭い指摘をする事がある。『偶然言ってみたら当たっちゃったよ』的な雰囲気醸し出してはいるが、それこそが作り出されているように感じてしまう・・・考えすぎだろうか？

「……無理はしていないよ」

実際、余り人付き合いの得意では無い私が、不思議とイリュとだけは普通に接する事ができた。それどころか、普通以上な付き合い合

いに自分自身が驚く程だったり クラスにも何とか打ち解けてきている様な気がしている。

「…もう学校は慣れた？」

今度は俯せになり顔を支えようと 足をパタパタさせているようだ：今度は子供っぽい仕草に思わず笑いが零れそうになる。普段の学校生活では見せない一面を 惜しげもなく晒す彼女が 私に対して心を許してくれているのだと 認識出来る瞬間だった。

「そうね……」

少し考えながら目の前のクローゼットを開けると中にはまだ真新しさの残る制服があった。今の学園指定の制服だ。全体はベージュを基調とした衿と袖が紺色のブレザーの制服を紫音は少し気に入っていた。

衿元のラインは2年生を表す青だ。因みに3年生は赤 1年生は黄色になっている。

「まあまあ…かな？」

とは言ったものの 実際まだ右も左も解らない事だらけで余裕が無いのが本音だ。

「ふうん…まあまあねえ…」

イリュが意味ありげに呟く：ベッドの軋む音がした・・・イリュが近付いてくる気配がした。ブラウスを着ていると、背後から伸びた彼女の腕に抱きしめられた。彼女のシャンプーの香りが私を包み込んだ。

「知ってる？男子の間じゃ何かと噂になってんのよ？イヒヒ」

背後からイリュが耳元でからかうように笑う。実際、からかっているのだからたちが悪い。

「そういうのはいいのっ！」

軽く彼女の手を払い 鏡台に向かった。この手の話題を得意としない紫音の顔は湯気が出るほど、赤面していたに違いない。こんな所を見られたら 余計にからかわれるに違いない！ 紫音は必死に顔を伏せて髪をとかした。

「えーつままないなあ」

イリュがふて腐れた声をあげ再びベッドにダイブする。顔は見えないが、私の態度を見て、満足しているに違いない。そんな被害妄想とも思える考えをしてしまうのは、日頃の付き合いのせいなのかもしれない……などと思ってしまう。

先にも述べたが、紫音はこういった話題は苦手だった。人付き合いですら悩む様な状態なのに……

恋愛なんて夢のまた夢の話だった。小学校時代に好意を寄せていた男の子が私の「眼」を気持ち悪いと言っていたのを聞いて以来 異性には一線を引いてしまう状態だった。

「紫音は可愛いんだからさあ……もつとこう……ああっ（／／▽／／／）」

イリュは一人でベットの上で悶々と枕と遊んでいる様だ……発想がオヤジ臭いな……

「…ハイハイ…f ^ | ^ ;」

適当に流しておく。その間に手早く髪を結いあげた。

それよりも自分の方こそどうなのよ……と言いたいのが本音だった。実際にイリリュシャはモテるのだ。下駄箱には手紙が山ほど入っていたり、声をかけられるなんて日常茶飯事である。その全てを断るのだから……相手の中には秀才の上級生やアイドルみたいなイケメンが居たとか居ないとか……ふとイリユがこちらを見ていた。

「……なに？」

「今…私がどうか考えたでしょ？」

………妙に勘がいいな

「別に…」

「じゃあ……エロい事だな！」

「違いますっ！」

「ははは………あーっ？またその髪っ！今時そんな地味な髪型いいよ？昭和だよっ！昭和の匂いがするよっ！」

鏡越しに イリユが近付いて来るのが見えた。……今日はやたらとつつかかるなあ……

「この方が楽でいいんだってば……昭和って……」

束ねた髪をお団子にしているだけなのだが…本当は目立ちたくないからあえて 地味にしているだけなんだけど…ね そんなに変かなあ・昭和とゆう言葉に少し凹んだ。

「…むしろイリユの髪こそどうにかしたら？」

すぐ後ろに立つ彼女の腰まである長い髪を指ですくってみせた。
彼女の髪は手入れが行き届いており 非常に繊細で美しい。街中を
歩いていたら 写真モデルやらないかと声を良くかけられるらしい。
この髪は目立つからねと言うのだが それだけでは無い事はこの髪
を見れば明白だった。

「あ？私？やだ…面倒臭いもん！それに私はこれ以上可愛くならな
くていいの！」

おいおい…そんなんで私に言うのかよ…しかもその言い方に朝か
らテンションが凹む自分が居た。
すいませんね！可愛くなくって！

ハジマリノウタ2

「……………」

急に静かになったので ふとイリュに目をやると案の定 何かを期待している目でこちらをみていた。時間も時間だし・

「……今からご飯なんだけど…」

「うんうん（＾|＾）」

既に満面の笑みだ。この先を言うべきか悩んだが・・・

「一応聞いてあげるけど…食べる？」

「うんうん（＾q＾）」

絶対に確信犯だ…

イリュを引き連れてキッチンに向かう。引き戸を開けるとそこがリビング兼のダイニングキッチンだ。

最早指定席となった椅子に座ると いつの間にか用意されていたマイ箸一式を用意する。よくみると

「いりゅ」と刻印までされている一点物だった。

「……いつの間に……」

飽きれながらも食事の用意をする。なんだか毎朝二人で食事をしている気がする。まあいいか・・・

料理が出来るまで…この不思議な親友（？）の事を話しておこう。

彼女の名はイリユーシャ・ハイヴァリエル 確か・・・なんとか

ニアからの留学生らしい・・・私もその辺は詳しくは知らない。仲間内ではイリュと呼んでいる。その見た目の美しさとは裏腹に自分の容姿を鼻にかけない性格で同性からの人気も高い。勿論異性からの人気もかなりある・・・らしいその辺りは紫音自身が興味が無いのでうろ覚えだ・・・それに加えて人懐っこい性格と男顔負けの行動力：その深紅に映える赤毛はインパクト抜群だ。勿論 スタイルも良い。胸とか・・・どんだけ成長期だよっ！って言いたくなるくらい・・・嫉妬とかじゃないからねっ！

それともう一つ・・・

「?!ちよっと!!イリュ!」

ポットが有り得ない音を立てて沸騰していた。彼女の赤い「眼」が更に深く紅く輝いていた。力を使っている証拠だ。その眼の輝きは神秘的だ。本来この世界に存在しない筈のもの・・・

紫音の声にイリュははっとする。その瞳から光が消えた。

「ごめんごめん紫音のエプロン姿に見とれてた(<艸>*)」

「...前回みたいにポットを爆破しないでよね……」

「手伝いはいいから座ってて……」

「はい」

イリュは素直にその場で姿勢を正した。どんな理由だよっ!と思いつながらポットの無事を確認する。どうやら無事の様だ・・・毎回生活道具を壊して 引越させようとしているのかと思ってしまう

ところだった。

彼女のもう一つの秘密・・・そう「魔眼」・・・だ　神と悪魔がもたらした神秘なる魔力の瞳・・・日常生活ではその見分けは付かないが　その力を発動させるとその瞳はその姿を現す。彼女の魔眼の色は「赤」・・・炎を司る属性だ。彼女は火を操る「炎の魔眼・深炎の赤眼」の保持者なのだ。彼女は最も強力とされる生まれもつての保持者「ナチュラル」だった。　「魔眼」にも力の差が存在する。彼女の様にナチュラルで強力な魔眼には深炎の赤眼の様な

『固体名・シリアルコード』がある。これはナチュラルにしか存在せず、その属性の上位存在であることを現している。ナチュラル以外にも稀に　コードを持った眼を持つ物が現れることもある。誕生より有する。

「生まれ持つ者」ナチュラル
成長過程で覚醒する者。

「目覚める者」キャリア
神や悪魔に一時的に力を与えられる者
「囁く者」ウイスパード

自分の意思とは関係なく憑依される者
「魅入られる者」チャームド
など：力を手に入れる環境に違いはあるが：その差は内包する魔力にあると言われている。

「お待ちせ：こんなモノで悪いけど：」

手早く盛りつけた皿をイリユの前に差し出す。それを見てイリユは
わぁ　と声をあげた。

「ううん、私紫音の目玉焼き大好き（＾Ｏ＾）」

今朝は　トーストに目玉焼き　ウインナーとコーンスープにコーヒ

ーだ。

「いただきます」

イリュは合掌するとトーストにかぶりついた。相変わらず見事な食べっぷりだ。しかし 作った者としてはこうも「美味しい」と連呼されて食べて貰えるのは嬉しい限りだ。なんだかんだと言いながらこの時間を喜んでいる自分が居る事に気づく。

過去に転校を繰り返して一人暮らしに慣れている紫音にとっては料理の腕前はその気になれば お店を出してもやっていけるであろうレベルであった。

本人にその自覚は無いのだが……

私がこの春からこの学園に転校してきて 一ヶ月……その日のうちに声をかけられた。何度も言うが私は人と接するのが苦手だ。でも……不思議と彼女とは打ち解けることが出来た。それは……私の決意の為か……それともこの特殊な学園の為か……

しかし一番はイリュの性格のおかげかもしれない。この事にはとても感謝している。

ハジマリノウタ3

この学園について語るには　まずこの世界について話そう。ここは皆さんの知る　地球　その世界に良く似てるけど…違う世界。そして「魔眼」を知ってるだろうか？神又は悪魔のもたらす神秘の結晶。それが　「魔眼」何故そんなモノがあるのかって？それは私にも解らないけど…今から100年前にとある科学者チームが多次元断層の解析に成功した…いわゆる別次元…別世界…その実験中に偶然にもこの世界は2つの世界と繋がってしまった。それが　俗に言う天界と魔界

天界…そこは光輝く天使達の……なんてのは聖書の受け売りで私達にはその次元を見ることは出来なかったらしい。魔界も同様だったと聞く。天界も魔界もこの世界とは分子構造が違うらしく人間がその世界の構築を理解できない様だ。そのかわり天界人と魔界人がこちらの世界にやって来る様になった。彼等は自身の分子構造レベルをこの世界に同期させる事によって　我々にもその姿を見せる事が出来るのだと言う。

彼等は見た目は私達人間と代わり無く普通に喋り普通に食事をした。でも　それはあくまで仮の姿

真の姿はやはり羽を持つ“光体”と呼ばれる別次元の存在。この世界ではそれだけの質量を再現できる魔力を持つ者は限られる上に個人での能力は著しく制限されてしまうらしい。そんなリスクを犯してまで彼等にしてもこの世界…特に”科学“は魅力的らしい。

もう一つは　魔界。彼等も人間と同じ容姿であった。中には角や尻尾を持つ者もいたが　しかしこれは仮の姿…こちらの世界では先に述べた天界の理由と同じく分子構造の違いにより、実体は人間の目には見えにくいらしい。やはり天界と同じ理由でこの世界に来訪

する者は多い。

二つの世界は仲が悪い……と思われがちだが既に和平に向けて歩み寄っていた。

過去に争いはあったが 今はそれらは解決しており 現在は良好な関係だと聞いている。

ここであるトラブルが発生した。

天界からは 「光素」 と呼ばれる。魔力の成分が…魔界からは 「魔素」と呼ばれる成分がこの世界に流れ込んでしまった。目には見えないが無味無臭 人体に取り込まれても数時間で消滅するため 影響は無いと思われていた――が 本来 存在しない物質の干渉により 人類に変化が起きた。それが 「魔眼」だった。

消滅した成分は蓄積されやがて眼球内で結晶化する。

ここまででは変化もなかっただ 「魔眼」^{ホルダー}保持者と呼ばれる存在になる… 既に世界の2／3がホルダーだと言う噂すらある。しかし問題なのはここからだ。結晶化と同様に体内で魔力を生成…内包する能力を身につけてしまった者…キャリアの誕生である。

「魔眼」

人間でありながら 魔力を生成し魔法を使役する者その属性に応じた 眼 を保持する。

火なら赤い魔眼 水なら青い魔眼 大地の黄色 風の緑など 四大精霊を基本としてその種類は数十にも及ぶと言われている。その多くは魔法を使用出来る様になるが 中には 魔力を戦闘力に変換する（魔闘士）や知力の発達する（魔学士）などがある。

各国はその力を研究し、やがてその力は悲劇を産む。

その力を軍事利用する者とそれを阻止する者の争いが始まり、瞬く間に世界中に飛び火する。

通常兵器を凌ぐその力はやがて危険視されその力を恐れた者達による 迫害：紛争：

やがては神界 魔界の2つの世界を巻き込む争いに発展する事態にまでなってしまった。

“ 神秘なる力を手にした者達はその力に魅入られる ”

「魅入られる者」チャームド が各地に誕生してしまった。彼等は本能のままに力を解放し 破壊と殺戮を行った。最早人類と魔眼との戦いになっていた。

事態を收拾するべく。天界 魔界 二つの世界の入口は「結界」（ゲート）と呼ばれる封印を施された。

これにより 光素 魔素の流入が収まり、魔眼保持者の力は弱まった。

さらに魔眼保持者の中にも戦争終結を望む者も多く、平和を願う彼らは やがて人類と協力し各地の紛争を沈静化させていった。一部の過激なチャームドを殲滅する事で長引くと思われた戦いも 一年で終結した。

これが 「魔眼戦争」と呼ばれる忌むべき歴史だった。

ここまですべてでも学校で習う 魔眼の歴史である。

しかし 平和は訪れなかった。この戦争により各地で使用された魔法により この世界で（魔力分子）が発生し新たなホルダーを誕生させた。再び魔眼による争いを懸念され、全ての魔眼保持者が忌み嫌われてしまう世界となってしまった。彼等への憎悪は迫害殺人 差別 紛争を呼び各地で悲しい事件が多発した。

そんな中 とある企業がこの国の地方の一部を買い取り事実上独立を発表

治外法権の指定地域を設立する。暗黒の時代にさした 一筋の光明

であつた。

ハジマリノウタ4

「ユグドラシル」

世界樹の名を冠した地域そのものが学園都市であり魔眼保持者を幅広く受け入れている。もちろん一般人から天界 魔界の魔眼を持たぬの人々も入学は自由だ。ここでは魔眼保持者の教育に力を入れている。その力を有効に活用する人材の育成が彼等の未来に繋がる と提唱している。実際 各地の紛争 犯罪は減少傾向にある。各国政府はこれを高く評価し「理想の未来像」や「人類・魔眼保持者の理想郷」などと賞賛する声明を発表し 転入希望者は爆発的に増大した。

しかし紫音は違和感を感じる。理想の未来・・・理想郷・・・？ 一体誰の理想なのだろうか？ そもそもホルダーになってしまった時点で理想とは大きく懸け離れてしまっているのだが？

（魔眼をここに閉じ込めてしまえ！）紫音にはそう言っている様 しか聞こえない。結局 この都市も偽りの自由の姿をした牢獄なのだ。

この学園に来る者の多くは 心に傷を持つものが多い。

ホルダーである彼女も今までの人生を平穏無事に過ごして来たとは お世辞にも言うことは出来ない。

「異端は異端でしかない」それがこの世界の本質であり 心理なのだ。人はそれぞれコミュニケーションに属する。そのコミュニケーションな異端であると判断されれば 緩やかに排除されてしまう。それは地域であり 学校であり 職場であり 家庭でもある。緩やかな排除はゆっくりと異端を追い詰める。そしていつせいに牙を剥くのだ。それは差別 迫害 暴力 いじめ と名を変えて一方的な排除の波が押し寄せるのだ。

そして彼らは居場所を失うのだ。・・・いやまだそれは命がある

だけ ましなのかもしれない・・・

しかし：そうだろうか？絶望的な考えの隅に違う思考が起き上がる・

ーやめろやめろ！また同じ過ちを繰り返すのか？

ーたえそうであつたとしても……僅かでも可能性があるなら……

ーいままでもそうやって・・・何度も裏切られ！絶望した！

ーわかつてる・・・わかつてる・・・でも・・・こんな私でも・・・必要としてくれる人がきつとどこかに居るはず！こんな私を認めてくれる人がどこかに居るはず！

彼女はそれに賭けてみたのだ。もしも：眼を持つ者が：その存在が許されるならば：そこが約束の地ではないだろうか？そこが本当の理想郷ではないだろうか？この学園の存在を知ってから 幾度となく繰り返し返された自問自答・・・答えなんか無い・・・だから・・・私はそれを確かめに来た。もう 涙の日々とはお別れだ。

コーヒーを飲み干すと勢い良く気合いを入れて立ち上がった。

「よっし！！！」

「わわっ！ナニナニ？！」

イリュが慌ててこちらを見る。私の勢いに驚いてコーヒーを少し溢したらしい。

私の親友に私は最高の笑顔を向ける。

強くなると決めたあの遠い日の約束 それでも逃げ続けた日々にも別

れを・・・

此処がきつと私の約束の場所！さあ
の場所・・・これが私の

始めよう！これが私の始まり

「ハジマリの詩」

ハジマリノトキ1

私は…宮蘭紫音みやざのしおんこの春にこの学園に転校してきた。

勿論 魔眼保持者だ…が今は訳あって適合者となっている…私の魔眼については…今は話したくない。

実家は首都圏にあり 普通の家庭 普通の両親の元に生まれ 普通の人生を送るはずだった…

5歳の時に魔眼が発動した。魔眼保持者「キャリア」だと言われた。日常生活に問題は無いと言われたが…

問題だらけだった。

魔眼のお陰で友人と呼べる友人も出来ず…ひたすら他人との接触を避ける毎日…よく引きこもりにならなかったと自分を褒めてあげたいくらいに普通に学校に通う毎日…お世辞にも楽しいとは言えない学校生活だった。

色々と苦勞を重ね…ネガティブな人生を変えるべく 今回 この学園都市に転入した。

高等部2年とゆう微妙な時期の転入は両親も快くは思っはくれなかっただろうが

私の意志の固さを知ると条件付きではあるが送り出してくれた。

「……ねえ…毎朝来るけど…イリュの寮は大丈夫なの？」

ドアに鍵をかけながらふと疑問に口にしてみた。ドアノブのセンサーに魔導リングをかざす。指輪が鍵の役割を果たしてドアがロックされる。この学園都市に住む者には全て支給されている品だ。体内の微量な魔力を認識して本人確認を行う優れモノである。鍵、身分証明、財布等その用途は広い。

「ん？何が？」

「時間とか…食事とか…」

確か寮母さんがいると聞いた気がした。

「んー大丈夫なんじゃないかな？別に何も言ってこないし…」

何だか少し気の毒な気がした。

私の住むアパートは両親が知人の紹介で見つけてくれたものだ。繁華街から徒歩10分 学園には徒歩15分価格の割には中々の立地条件だった。バス トイレ付き 小さいながらもキッチン完備 同じ敷地内に管理人の老夫婦が住んでいる。

日当たりの良い二階の一室を契約出来たのは 幸運であつたと言いたいようがない。

なのにイリュが毎朝誘いに来る理由は2つ

一つは私の身を案じての事

イリュ曰く

「私の寮に侵入するには軍隊でも無理！！」

なんだそうだ……

実の所 先日この近辺で謎の爆発事故が起きているから……が本音らしい。

少し嬉しかったりする。

もう一つは同じ寮生が気に入らないらしい……f ^ | ^ ; その割

合は後者が少し高かったりする。その為か私も首を縦には振らないのだった。

やがて 学園の敷地を表す中世風の石垣の壁が見えた。まるまる都市があるのだからその規模は半端なものではない。暫く進むと校門がある。守衛が二人 常に交代制で在駐している。その脇にある建物は守衛が数人待機しており近隣の警備を行ったりもしている。

門は東西南北の四ヶ所にあり更にその中間にもある。計8ヵ所その全てが 守衛と リング認証のセキュリティである。駅の改札口……と言えば解りやすいだろうか？基本的には市街地同様に 攻撃魔法は全面禁止である。敷地内で攻撃魔法が使用された場合敷地内に無数にあるセンサーがこれを感じし 直ぐに解除魔法が発動されるらしい。

学校なので魔法の授業は勿論ある。それらの場合は特別な施設を使用する事になっている。これだけの施設の運営には途方もない費用がかかる………と想像していたら、意外なシステムが導入されていた。

それは 生徒から魔力を集めている事だった。魔導リングから情報を受け取り 毎日 一定量の魔力を敷地内で吸収しているのだ。火の魔力は火力や暖房 照明等に……水の魔力は水道 生活水に変換し 使用する。更に余分な魔力は都市に売却され 一般生活にも浸透している。その収益は設備投資や 教員の給料になっている。勿論 生徒は学費が大幅に免除される事もあるこの学園都市の魅力の一つとも言えるだろう。

門を過ぎた辺りでふと虚脱感があった……がすぐにその感覚は消える……

魔力が吸収されたようだ。横でイリュが怪訝な表情をしていた。

「……………今日は……………もう駄目かも……………」

予想以上に魔力を吸収されたようだ。吸収には個人差がある、イリュの様に強力な魔力の持ち主からは一定量の魔力を徴収するらしい。

学園の説明によれば 魔力の保有量に応じて 1割から2割を徴収すると言っていたが・・・

「大丈夫？」

余りにも項垂れる様子に思わず声をかけた。

「・・・嬉しいわ・・・紫音・・・こんなにも貴女に愛されていたなんて・・・」

瞬間 抱きしめられた。咄嗟の事で回避出来ずその場で悶絶する。がすぐにその戒めから逃れようと抵抗を試みる。

「ちょー私はそんな趣味無いってばー!!」

その結果 公衆の面前でイリュとの朝のふざけあいが再び勃発するのだった。

ハジマリノトキ2

「あらあら…朝からお盛んな事で…」

声の先には長い黒髪 of 眼鏡っ娘。その見た目からは才女を連想させる。確かクラスメイトの……

「…萌え田崎さん？」

「Σ（ノド）まっ…前田崎よっ！！」

物凄い剣幕で怒られた。後ろでイリュが大爆笑していた。

「ごめんなさいっ！いつもイリュが言ってるからてつきり……」

「……なかなかやるわね」

前田崎は乱れた髪を直しながらそう言った。隣のイリュはまだ笑っていた。

「紫音………イイネッ！」

そう言って親指を立てる。

彼女は 前田崎 律子 IT業界では有名な「前田崎グループ」の一人娘で「電脳」の魔学士である。しかしその家柄を振りかざすのを嫌い 今はイリュと同じ寮に住んでいる。

「イリュ…またアリア姉さんに言わずに出掛けたでしょ？」

「あははは……だって紫音のご飯の方が美味しいんだもん。」

本音はそれだったのか？

「……それはまあ否定しないけど……せめて一言かけなさいよ。」

「……善処します。」

イリュはそう言って 敬礼した。

「……宮園も大変でしょ？こんなのに付きまとわれて……」

「そんな事ないよ…前田崎さんこそ何だか大変そうだね（^| ^;）」

「……律子でいいよ。私も紫音って呼ぶから……こうしてゆっくり話すのは初めてかもね」

同じクラスなのにね と彼女は笑った。

「さて…親睦も深まったところでさっさと我がクラスに参りましょうか。」

イリュが腕時計を指差し先に進む事を促した。

「初めてこの都市に来た時は流石に驚いたわ。」

列車を待つでホームで律子はそう語った。まだ馴れていない紫音への配慮だったのかそんな話を始めた。

「…そして、初めて乗った列車は隣の幼稚園に行ったんだよね……」

茶化すイリュに睨みをきかせ……咳払いをした。

「時にはそんな事も……ある」

と、同時に魔導列車がホームに滑り込む。校門から数十メートル先は駅のホームになっている。学園内に電車が走る姿は今までの常識を打ち砕くには十分だった。

その理由はこの学園が都市である為　その規模は1日がかかりでも全てをまわすることは無理と言われている。敷地内を巨大なドーナツと仮定してほしい。その中央が学園の中枢部　（中央特区）だ。職員棟や総合施設　生徒会施設　各役員会施設　購買施設等がある。

周囲のドーナツエリアは大きく4つに区分される。乳児　未就学児　低学年学生服を主に教育する（初等部）通常の中学生　高校生に該当する（高等部）専門学科を専攻する（大学院）更にその筋のエキスパートとして生活する為の（学術院）のエリアに別れる。それぞれのエリアの干渉を最低限度にする為　エリア間は巨大な水路により分割されており　渡航手段は学園内を縦横無尽に走り続ける魔導列車か中央特区から行くしかない。三人は車内に乗り込むと近場の席に座る。行き先は（高等部217）となっている。つまりこの列車が高等部のそれぞれの校舎に停車する専用列車である。もちろん動力は魔力で設計・製造は学術院の一部企業が監修している。やがて列車は地下に潜り込み停車した。各校舎の地下がプラットフォームでもあるのだ。

「じゃあ　私は職員室に寄って行くから……」

一階上の下駄箱で律子はそう言い残し颯爽と歩き去った。いかにも勤勉で真面目……少々堅いイメージを受ける。企業イメージを意識した部分もある為か　真面目を地で行くタイプ……とはイリュの言葉だ。

「…なんで萌え田崎なの？」

疑問に思っていたことをイリュに聞いてみた。現時点では萌えの要素を感じ取れなかった。

「んー多分今日帰るまでには理解できると思う」

と さらに疑問な答えで返された。後に 身をもって理解するのだが。

「…さてと」

イリュは深呼吸して下駄箱を開くと 同時に数枚の手紙が床に散らばり落ちた。

「…また…か」

そう言って 首のチョーカーの水晶を触る。彼女の赤毛とよく似た内部で深紅の炎が揺らめいている様に見える不思議な水晶だ。何かあるとこれをいじるのが 彼女の癖だと 最近気付いた。その指は 愛でる様に優しく この水晶が彼女にとってどれだけ大事な物か理解できた。

「大切な物なんだね」

紫音の言葉が一瞬理解出来ない様な仕草の後 ようやく紫音の視線が水晶を見ている事に気付いた。

「……よく見てるね……?!もしかして……紫音……私の事……」

「いや・それはないから・」

速攻で否定しておいた。イリュはそれ以上はふざけたことは言わず少し思案した後こうつぶやいた。

「これは・私と彼を結ぶ唯一の絆なんだ・」
「えっ!？」

予想していなかった(彼)とゆう単語に激しく反応してしまった。今まで行動を共にしてきてイリュの周囲に異性の気配が無かった上に 毎朝のあのやり取り・本気で百合っ娘なのかと思いつける寸前の出来事だった。

「・・・今 百合っ娘の癖にとか 考えたでしょ」

・・・ホントにカンがいいのな・・・

「それより・・・彼って・・・？」

「言葉通りだよ・・・彼は彼 私の全て・・・だからこれはいらない」

拾い上げた手紙の束を宙に放ると 一瞬で炎が上がり灰も残らず消し去った。彼女のように強力な魔力を持った保持者は初級の魔法や日常生活においての魔力の使用は予備動作 及び呪文詠唱をキャンセルできる。高度な使用法や上級魔法になればなるほど呪文は長く複雑になってゆく。各個人の能力や熟練度が大きく影響するといわれている。先にも述べたように学園内は基本攻撃的な呪文は一切無効化^{スベル}される。今のイリュは火の(燃える)とゆう概念だけを行使したのだ。これは上級魔術師のみが行える

(精霊の使役)による効果だった。…………正直凄いな…と感心して

しまう。

今の紫音には精霊はおろか魔力の安定化すらままならない状態だった。

「さっ：早く教室に行こう」

この話は終わりと言わんばかりに、イリユは紫音の背後に回り込み、その背中を押して行くのだった。今の自分の表情を紫音に見られたくないイリユシャの小さな抵抗だった。

ハジマリノトキ3

「お前達…さっさと席に着け」

一人の女性が教室に颯爽と入ってきた。此処2年Bー7組の担任 イングリッド・S・ウルガノフだった。腰まである長い銀髪を二つに束ね、教壇の前に来ると、つり上がった眼鏡の縁を指で押し上げた。その奥に輝く金の瞳は見る者を惹き付ける。手にしていた分厚い本を教壇に叩き付けた。

「お前達は私の言葉を理解出来ないのか？席につけ！二度も言わせるな！」

見た目からは想像出来ない様なキツイ言葉が飛び出す・・その前にあるように「ド・S」な口調なのである。が本人はこれが普通の話し方であり、もちろん悪気は一切無い。この世界に来て初めて言語を習った際に不手際が生じた・・らしい。魔界屈指の魔導師を代々産み出してきたウルガノフ家の次期当主だ。ちなみに S は正式名称でのみ使用する為 発音はしないらしい。

さて このクラスの男子はこのBー7組に入れた事を誇りに思うらしい。その理由はこのイングリッド先生らしい。全学年の全クラスにおいて天界 魔界からの派遣教師はそう多くない。さらにその中でも若く美しい教師など僅かであった。そうなのだ イングリッドは若く美しい教師なのだ。次期当主と聞いて 皆むさ苦しいおっさんを想像していたらしい。魔界の貴族でありながら地位や権力などには興味を見せないその立ち振舞いは男子生徒だけでなく女子生徒にも受け入れられた。その見事なプロポーションにもかかわらず 終日ジャージで過ごす事が彼女の信念であるらしい。こちらの世界に来て間もない頃にジャージと出会ってしま

その機能性と簡便性に衝撃をうけたらしい。魔界の貴族ともなるとそれ相応の格好を求められてしまう。それ以来彼女は一日中ジャージ姿で過ごせる職業を探し教師を選んだ……と聞く。

初めてこの先生と話したときは 正直紫音は泣きそうになった……いや 泣いた。

「貴様が転校生か？少し顔の作りが良いだけの下等生物め！私のクラスに入ること後悔させてやるぞ！」

転校初日にガクガクブルブルしていた私に 先生の言葉を通訳(?)してくれたのがイリュだったのだ。

先生のキツイ言葉はその逆の意味である事 本当はやさしい先生である事 ドSなんて言われてるけど 本当は少しMっ気がある事などを教えてくれた。このクラスも新学期初日は全員が鬱になってしまいそうな位の状態だったらしい。校長の取り計らいで イングリッドの誤解も解け今ではこのキツイ言葉にも 「はーい」 と笑顔で応えることが出来るくらいに打ち解けている。中には身悶える者もいるとかいないとか……

「ようし！貴様達！来月いよいよ『全学級対抗魔術選抜大会』が開催される事となった！このイングリッドの担当するクラスである以上は敗北は許されない！……しかし だ！貴様達虫けらのような連中では予選突破すら出来ないだろう！……そこで これより 私自らが魔術についての何たるかを貴様達に教鞭を振るってやる……光栄に思うが良い！」

ばしばしと教壇の上の本を叩く……一部生徒から「おおっ」と、どよめきがあがる。担任なんだから教えるのは当たり前………
……教えてないのですか？！

「やべえ・・・ついにイングリッド先生の授業が受けられるのか・・・」
「生きてて良かった！！神様！感謝します！」

などと 男子生徒が色めき立った。・・・授業・・・進んでないんだ・・・何だかいつも 助手みたいな人ばかりが講義してると思ってたんだ」・・・あと 先生魔族だから神様に感謝したらまずいでしょ？などと考えると前からプリントが回ってきた。ちなみに私は最左列の最後尾 イリュ曰く『転校生の席』にいる・・・前の席はイリュだったりする。

「・・・めんどいなあ」

プリントを渡す際にイリュがそうもらした。・・・ふむふむ・・・確かに。魔法初期講座から技術講座 魔法戦術講座 魔法実践実習・・・普通の授業は無いのですか？
今日からのすべての授業時間が魔法に関するものばかりだった。

「先生・普通の授業は無いのですか？」そう質問したのは 萌え田崎・・・いや 律子だった。

「うむ 無い」 先生即答。

「いいか 貴様達！これは全学年対象の決定事項だ！これは大会と称しているが 貴様達の魔眼を良く知るためのものでもある。世間からは魔眼はクズのような扱いを受けてはいるが 使い方さえ誤らなければ人命救助や大きな助けとなる場合が多い。本来魔法とはそういうものだからな。十分に理解 認識していない者が馬鹿な低級悪魔や腐れ堕天使にそそのかされて「チャームド」などになってしまふ。これを機会に魔法 魔眼に対する認識を私が生まれてきたことを後悔するほど 親切！丁寧！その体の隅々まで叩き込んでやろう！・・・しかし 大会である以上は優勝以外は認めないからな！」

敵する熱量を生み出すには、ファイアボールが何発必要か』・・・とか『敵から情報を聞き出すために有効な魔法は・A…土属性 中級魔法（棘姫…ニードルバインド）（土中から発生した棘によって対象を拘束する。追加効果…毒 麻痺 上級術者になれば即死効果を付与可能）B…水属性中級魔法（氷足枷…アイススレイブ）（対象の任意の部分（主に手足）を凍結 四肢を封じる 上級者になれば形状を変化させ 小さな槍の様に変化させ手足を地面に縫い付ける事も可能）C…風属性低級魔法（雷縛…ライオットスタン）（瞬間的に雷撃を発生させ対象を感電させる（スタンガンの原理））』とか・・・物騒な問題じゃないじゃないか！！もうこれは授業ではない・・・訓練だ！そんな私の目の前に突然ジュースが置かれた。・・・びっくりした・・・あぶないあぶない・・・念の為顔を伏せたままおかえりと言う。

購買でパンを買ってきてくれたイリュだった。彼女はたまに「朝飯のお礼」と昼にパンを買ってくれる・・・別にいいのに・・・

「しかし 先生にも参ったわね・・・」

隣の席に移動してきた律子がそう言った。ついでに 一緒にしても？と言われたので 快諾した。 彼女は弁当持参派の様だ。

「そうそう 趣旨を履き違えてるな」

イリュもうなずいてパンにかぶりつく・・・「丸ごと高野豆腐」・・・なかなか渋いチョイスですね・・・できれば別々にお会いしたかった・・・

「午後の実習・・・やな予感するなあ・・・」

イリュ1個目完食・・・2個目「クリームぜんざいパン」・・・うわ

ああああ 何故クリーム？ 普通あんぱんでしょ?!とゆうか・・・
イリュ食べるの早いわね・・・私なんて高野豆腐の汁に悪戦苦闘して
るのに・・・イリュは何故か変り種のパンを買うことが多い。普
通のパンは食べ飽きたからだと言う・・・変り種すぎじゃね?と思
ってしまうがここはぐつと飲み込む。

「・・・そうね・・・出来れば、魔法は余り使いたくないわね・・・」

そう言ったのは律子だった。・・・意外だ・・・何でも出来そんな感じ
じんだけど、苦手なものもあるのか・・・

「・・・そうか 紫音は知らなかったっけ 私の魔眼特性は（博識）
の魔学・・・魔眼は（黒の教典…ブラックバイブル）属性は・・・闇」

私の疑問を感じ取ったのか 律子がそう告げた。・・・属性闇?そ
れって・・・

「うん 私は人間と魔族のハーフなんだ」

律子は気にする風でもなくさらっとそう言った。実際 魔族 神
族とのハーフは多いだがその多くはそれぞれの能力を引き継ぐ可能
性は低い。人間界で生まれる為 人間のDNAが勝る・・・とゆう
のが一般論らしいが 細かいことはわかってはいない。主な遺伝と
しては 律子のような魔眼を遺伝しその多くは知能レベルを引き上
げる（魔学）か 身体能力を向上させる（魔闘）を発現させる者が
大多数だった。その中でもまれに魔眼を受け継ぐ者も現れる。律子
は後者のようだ・・・とゆうことはナチュラルの閥属性か・・・理
論上では魔族と同じレベルだが 体が人間の為きつと力はあまり発
現できないのだろう。

「へえ、そうなんだ」

私は余り気にしない風に返事をしておく。こういった特殊な魔眼保持者は相手がどう思うか非常に気にする部分が強。だからそれが普通であるように振舞うのが一番良い。

そんな私の意図が通じたのか、律子は笑みを浮かべた。だから私も笑み返した。

「ホント 貴女とは仲良く慣れそうね」

律子はそのクールな見た目から想像できないくらいの笑みを浮かべた。・・・成る程・・・これは萌えちゃうかもね。

しかし紫音が『萌え田崎』の真の意味を理解するのは後日のことであつた。

ハジマリノトキ4

……………終わった……………

午後の特別施設においての実技演習が終わった…いや　色んな意味で終わった……………特別施設は各クラス棟に隣接して建てられている　魔術　戦闘技術の実技演習に使用される競技施設のような物だ。内部は空間魔法により普通の体育祭サイズから　国一個分のサイズに変更可能だ。　授業内容はバスケットから模擬戦闘まで幅広く利用できる。　今回の授業ではイングリッドを中心に半径100メートルの荒野を設定した。内部の設定も平野　市街地　森林などあらゆる実在する風景を再現できる模倣結界コピーワールドが使用され更には激しい戦闘にも耐えられる様に最大最強の多重結界マジエスタ十二使徒の魔鏡がかけられている。この結界は合わせ鏡の様に結界が結界を写し無限に増え続ける為
破ることは非常に困難と言われている。当然それは外からの衝撃ではなく内側からの衝撃に対しての話である。

「今からお前達は各属性初級魔法の（防御…シールド）を展開し私の攻撃魔法から時間内逃げ続ける」

……………はい？

リングの通信機能からそう言い終わるや否やイングリッドは両手を広げ無詠唱で魔弾マジックバレットを無差別に打ち出した。　瞬時に阿鼻叫喚の地獄絵図と化する。

紫音は咄嗟にリングをはめた手をかざし　防衛機能　障壁シールドを展開させた。

魔眼を持つキャリアならばその属性防御魔法が使えるのだが　無

属性のホルダーは基本魔法が使えない。よって内包魔力を魔導リングにより増幅させ リングの内臓基本魔法を行使させている。何とか初撃を防いだものの 次々と魔弾が降り注ぐ中 既に生徒の半数以上がシールドを破られ魔弾の効果により地面にひれ伏していた。……今回の魔弾の効果は先生のオリジナルスペル（特殊麻痺…パラライズ…ひれ伏せ愚民共！）の様だ……イングリッドならではのド・S魔法の一つである。

「貴様達は今まで何を聞いていたのだ？シールドは持続させてこそ意味のある魔法だ。己の魔力を安定させて供給する事でその強度を維持できるのだぞ？シールドは一度発動すれば魔力を供給し続ける限りは効果が持続する、敵の初撃を防いだ時こそ最大の好機なのだ。貴様達には徹底的にシールドの魔法を強化してもらうぞ！無能な貴様達でもそれくらいなら出来るだろう？ではゆくぞ！あはははははは」

再び魔弾の数が増えた 紫音はリングのある手を突きだし、只耐えるしかなかった。ふと 隣を見るとイリュが平然とした顔でこちらに向かってきた。

「……全くやり過ぎだったーの」

イリュの周りには薄い炎の幕が漂っていた。（衣障壁…コートシールド）と呼ばれる 上級者が無意識に纏う防御障壁だ。炎がまるで生き物の様にイリュに迫る魔弾を絡めとり燃やし尽くす。平常時から術者に害なす存在に対しては自動で発動する。

「……紫音…防ぐってイメージしちゃ駄目だよ、硬い盾をイメージするんだよ…」

暫く私の様子を見ていたイリュがそう言った。ふむふむ…確かに今

の私は防ぐ事を考えていた。……盾か…昔映画で見た中世の騎士の盾をイメージしてみた。

……気持ち防ぐ事に負担を感じなくなった。なるほど流石は魔術上級者だけあって適切な指摘だな……と感心してみる。

そう思ったところで 後ろがにわかに騒がしい事に気付いた。

「わはは 上手いな！カイル！こらセンセもびっくりや！」

見れば3人の男子生徒が一人の男子生徒にちよっかいをかけているようだ。関西弁のややガラの悪い茶髪の生徒がボスっぽい。確か・
・西園寺龍彦さいおんじ たつひこ有力な名家の三男だと聞く。見れば彼の周りにも風が渦巻いている……

イリュと違うところは彼がリングのついた手をかざしている事……意識的に障壁を展開している点だ。

……それなりに力はあるのに家庭での境遇に我慢できず、ただむやみに力を振りかざすだけの愚か者……

とは イリュの言葉だ。後の二人は取り巻きの様だ。（トリーとマキー）と呼ばれている……いやいや 適当に言ってるわけじゃないよ？ 服部君トリイ マキー榎村君らしい……まあモブっぽいから解説はいいや。

この3人は先生の間を見ては 後ろの生徒……カイル…アルヴァレルに魔弾を放っていた。彼は必死にそれをかわしていた。

「相変わらず逃げるのだけは天才的やな！お前才能あるで！立派なピエロになれるで！」

西園寺の言葉に取り巻きが笑う……嫌だな……紫音は顔をしかめ露骨に嫌悪感を表した。イリュも同じような顔をしていた。イリュの性格ならファイヤボールの1発くらいぶち込むかと思っていたが 意外にもそれ以上は何もしなかった。

・・・救えるだけの力が在りながら・見ないフリをするというのだろうか？・・・親友と思っていたがイリュこの行為に紫音の心はざわついた・・・しかし、今イリュに期待して自分で何もしようとならない自分こそが一番卑怯な人間だと理解してしまった。・・・軽い自己嫌悪に陥りつつも 紫音は勇気を出して彼らに声をかけた。

「ちょっとー」

瞬間 西園寺達の障壁が土煙と共に消し飛んだ。・・・消えたのではない 力で塗り取られたのだ！・・・紫音は咄嗟に顔を背けた。・・・まずい・・・やってしまった！！

「くおらあああああ！！その無能共！」

イングリッドがこちらに気づき集中して魔弾を打ち込んできた。4人の居た場所に魔弾が殺到する。その瞬間に妙な感覚に囚われた。・・・時間がゆっくり流れている？【時間停滞】の呪文だろうか？闇属性なので先生の仕業かと思ったが見る限り先生も停滞している。推測する限りこの演習場全てが停滞している。恐ろしいほどの高密度な魔法が行使されていた。次の瞬間土煙の中から凄いスピードで誰かが飛び出し 空中の魔弾をかわしながら移動していた。【加速】だろうか？精霊の働きが見受けられないから光属性の【光速】だろうか？・・・ん？あれあれ？この組み合わせは何かおかしくないかい？疑問が湧き上がった所に人の気配がした。左側から覗き込まれた。 白金の髪 金の瞳 カイル・アルヴァレルだった。

「へえ・・・この状況で動けるんだ・・・と言っても思考だけみたいだね でも凄いよ」

そう言い終る前に右側に移動していた。

「・・・助けてくれてありがとう・・・でも僕には関わらない方がいい・・・5秒後に時間は動き出す、その時君はこの事を覚えていない・・・」

彼の気配が遠ざかる・・・同じく今この瞬間の記憶が白く・・・白く・・・

「ぐわああああ！この格好はあかん！！！！！！」

西園寺の悲鳴で紫音は我にかえった。先生の魔弾を受けた3人はM字開脚の様なポーズになっていた。・・・くっ！！少し笑えた！隣のイリュも笑いを堪えている様だった。・・・あれ？何か大事なことを・・・？まあいいか・・・

時間が来たようで先生はもう構えを解いていた。・・・終わった・・・安堵感からその場にへなへなと座り込んでしまった。

私の後ろでイリュは腰に手をあてて反対側を見ていた・・・そこには白金の髪の生徒が居た・・・カイルだ・・・ん？何故他にも生徒が居るのに 彼を見ていたなど言えるのだろうか？私はそう思い込んでいるだけ。見ているのはイリュではない・・・私が見ているのだ・・・なんで？

「・・・浅かったわね・・・」

「えっ？何が？」

「・・・魔弾は防ぐより かわす方が遥かに難易度が高いの・・・まあ覚えておいて・・・」

「?????」

イリュの言っている内容が良く理解できなかった・・・とゆうか意

味不明？ でもそれは重要な事だと感じた。

カイル…アルヴァレル・・・何故彼がこんなに気になるのだろうか？

紫音は気付いていなかった。
分が巻き込まれていた事を。

この時 既に大きな運命の歯車に自

ナミダノトキ

「さて……帰ろう」

つつい物思いにふけてしまい 気がつけばこんな時間……ちなみにイリュは急用が入、慌てて帰っていった。代わりに律子に頼まれて明日の授業の資料の準備をしていたのだが……流石は萌え田崎……イリュの言っていた意味を理解出来た気がした。まあこの辺りは後日にでも――

帰り支度をしてから教室を出た。電車の気分ではなかったので一人歩いて下校した。ふと何気に振り返ると紫音はその光景に息を呑んだ。夕暮れに校舎が赤く染まっていた。それは紫音の記憶にある赤い校舎がかぶった。

「……………出来損ない……………か……………」

自嘲的に呟いた。紫音が小学校時代に友達に言われた言葉だった。

……………

その日は学校の発表会の準備だった。クラスを飾り付け 全員で劇を披露するはずだった。……仲良しのあの娘と二人で最後の飾りつけをしていた。彼女は憧れの主役で手作りのドレスで舞台上で舞うはずだった。

（昨日魔眼の人が火をつけるのをみたの…凄かったわ）

友達が興奮したように言った。紫音は思わず身構えた……しかし彼女は初めて見た魔法に憧れと驚きの表情で語った。

（彼女は…私が魔眼だとわかったら皆の様に離れてしまうのだろうか？）

そんな考えが浮かんた。だって彼女は…魔眼を…魔法を嫌っていないもの。もしかしたら私の事も・・・本当の自分を理解してくれる本当の友達……（真友）いつしか紫音はそんな考えを持つようになった。

（……ちゃん…あのね…これは絶対秘密だよ！実は私…）

幼い心は重大な判断を軽く見てしまう。言っではいけないと母と約束したにもかかわらず……

（ホントに?! 紫音も火を出せるの?）

（…えっ? ……あんまり上手くは出来ないけど……）

せがむ友人に気圧されて（光…ライト）の呪文に挑戦 ……成功
手のひらに小さな明かりが蛍の様に灯った。

（うわあ凄い! みんなー! 紫音が凄いんだよ!）

突然 その娘がクラスに向かって叫んだ。何事かとみんなが集まってくる。

（えっ?! ……何で? 秘密だよって言ったじゃない!）

（だって…面白いじゃない）

……オモシロイ? ナニガ? ……

幼い心は時として残酷な結果を招く

―その純粹さ故に

―その幼稚さ故に

―他者の痛みを知らぬが故に

―他人の気持ちをまだ理解出来ないが故に

幼い希望を無惨にも踏みにじってしまう。

紫音の周り殺到する子供達 自身が好奇の目に晒される恐怖 紫

音は耳を塞ぎしやがみこんだ。

（早く魔法を見せてよ）（わっ! こいつ目の色が変わぞ?!）彼等の言葉が紫音の心を追い立てる。

(やめてー！ー！ー！)

紫音の叫びと共に教室のあちこちに炎が燃え上がった。蟻の子を散らす様に子供達は悲鳴を上げて逃げ惑った。

(紫音！やめて！紫音！私のドレスが！)

彼女の叫びに紫音ははっとした。騒ぎを聞いて駆けつけた教師によって生徒は外に連れ出されていた。

私の隣では相変わらず彼女が喚いていた。止めてあげたいけど…：こうなると無理なんだ…：彼女が着る筈だったドレスは目の前で炎に包まれ灰になっていった。

(ごめんなさい…：止められない…：止められないの！！)

この時はまだ、紫音は魔眼の力をコントロール出来ないでいた。内包する魔力が大き過ぎるのかそれとも幼い子供だったからか…：結果は感情に左右されやすかった。

(何とかしなさいよ！…：この…：出来損ない！)

ああ…：そうか…：私は出来損ないだったんだ…

その時の彼女の目を私は生涯忘れないだろう。

私を憎んでいた。

私を非難していた。

私を呪っていた。

私の存在を否定していた。

私はその場から逃げ出した。教室を飛び出し階段を駆け下りた。怖かった…：自分の力が。後悔した…：自分の愚かさを。信じたかった…：友達だったあの娘を。振り返ると夕陽に赤く映えた校舎が紫音を威圧した―まるで彼女を責める様に。

そこから先は余り覚えていない。会いに来た先生にも会わず部屋に閉じ込もっていた。幸い怪我人もなく教室の一部と道具が燃えただけで発表会も無事に終わった―先生はそう言っていたらしい。両親は怒る事無く私の話を聞いてくれた…：そして私はまた転校した。

思考を一区切りすると顔を上げた。気がつけば通学路の近くの庭園にあるベンチに座っていた。既に日は落ち辺りは薄暗くなっていた。

あの時は涙ひとつこぼさなかった。ただ怖かった・・・それだけだった。しかし今は違う……

「……………うっ……………うっ……………」

押し寄せる感情の波に堪えられなくなり嗚咽を漏らした。

（出来損ない）

鋭い言葉の牙が時間をかけて今やっと紫音の心に突き刺さった。

紫音はその痛みをどうする事も出来ず、ただ体を抱えて涙するしかなかった。

ヤミノフルヨル1

「……間に合わなかった」

紫音はシャッターの閉まった店の前でガックリと項垂れた。今夜はこの（浜中精肉店）の手作りコロッケ（120円）にしようと決めていたのに……具沢山な所が母親の作るコロッケに似ていたのが気に入っていた。この店はコロッケを看板商品にしている事もあり主な商品が売り切れるとその時点で閉店してしまう。まさか自分があんなに泣いてしまうとは……予想以上に自分が我慢していたのだろうか……？朝のイリュの言葉を思い出す。

（そんな風に見えていたのだろうか？……見えてたんだろうな……）

先程の自分を思い出し少しだけ気恥ずかしくなった。……しかし幾らか気持ちりが軽く感じる事気がした。

「さて……仕方ない……今夜はあそこのスーパーで買って帰るか……」

紫音は気を取り直してトボトボと歩き出した。この店はアパートから離れた場所に在る為いつも買い物をする商店街までは少し歩かなければならなかった。週末のこの時間では人通りもまばらで一般家庭では夕食後の家族の団欒の真っ最中であろう。

「……さて」

紫音は三差路で立ち止まる。右にいけばそれなりに店の立ち並ぶ明るい道……しかし時間はかかる。左に行けば既に暗いオフィス街

…目的地迄は一直線だ。……………暫く悩んで左を選んだ。……………理由はただ早く家に帰りたいかったから。

オフィス街といっても広い道路に並木道が並ぶ……………な感じではなくて 路地裏みたいな道に二流三流企業が箱詰めされた雑居ビルが立ち並ぶエリアだ。昼間はサラリーマンやOLさんで賑わうこの道も夜は全くの別世界 だった。

(……………物語とかで野良猫とか出てきそうな雰囲気ね ……その角のゴミ箱とかひっくり返して……………) などと他愛もない 想像をしながら歩いていた。

次の瞬間 想像通りにゴミ箱が弾き飛ばされ何かが路面を転がった。

「なっ?! 何っ?!」

紫音は鞆を抱きしめ身構えた……………だってそれは猫なんかよりも大きくて……………ゆっくりと二本足で立ち上がったのだから……………え? 立ち上がるっ……………て

ソレは身の丈は一メートルほど在る猫だった……………いや……………不細工な猫だ。茶色い毛で全身を覆われておりその両手(?)の爪は鋭く長い。口は耳元まで裂けた様に大きく その口には鋭い牙が乱雑に並んでいた。その目は細く鋭く憎悪に燃えるかの様に赤く輝いていた。ソレはふらふらと立ち上がると自分が飛んできた方向に向け

背を低く構えると 威嚇の声を発した。次の瞬間 その方向から火の玉が飛んできた。……………(火球…ファイアボール) の呪文だ。火属性の初級呪文だが この速度 精度 威力を見れば、使用者がなかなかの熟練者だと推測できた。魔法は術者の熟練度によってその姿を変える。初めてファイアボールを使用した者には火の玉を作り出す作業でしかない。熟練してゆくに つれ 攻撃力 魔力消費量

軽減 詠唱破棄 貫通 多重効果付属など 術者と共に進化

して行くのだ。再びファイアボールが三発　ソレに向けて襲いかかった。ソレは敏感に反応して二発をかわした先で三発目の直撃を受けた。瞬時にソレは火だるまと化した。

「ギニャアアアア……」

猫っぽいソレは猫っぽい断末魔の叫びをあげて木っ端微塵に吹き飛んだ。その残骸は大気に溶け込む様に煙と化して消え去った。

「……………」

紫音はその場に尻餅をついた。……何なの？これ？　最後のファイアボールには「加速」「殺傷力上昇」「爆発」の効果が付与されていた。最初の二発は囷……対象を目的の位置に誘い込むためのモノだ。その証拠に最初の二発は加速の効果が強く付与されていなかった。避けさせる事が目的だからだ。三発目には強い殺傷力が感じられた。

こんな状況でありながらも紫音の（眼）は分析していた。^{アナライズ}別な方角から三匹のソレが現れた。「ワイルドキャット」　そうアナライズされた。…連中はまだ紫音に気がついていない…

「……逃げないと……」

紫音はふらふらと立ち上がり後ずさりした……が見えない壁に阻まれた。

結界だ……そんな筈は…自分がついさつき歩いてきた場所なのに……
^{コピーワールド} ^{マジエスタ}模倣結界十二使徒の魔鏡…紫音の目によりアナライズされた結界を瞬時に理解する。この区域に学園の演習場と同規模かそれ以上の結界が張り巡らされていた。故に紫音は追い詰められる形になってしまった。

(…何故こんな事に?…)

恐怖で膝が震えていた…どうする? 逃げる事も出来ずこのまま見つからない保証もない…見つかるのは時間の問題だ、この場所では戦闘が行われていた…このワイルドキャットと敵対する存在もいるという事だ。…それが味方になってくれるとは限らない。

ワイルドキャットの一匹が紫音の存在に気付いた様だ…威嚇の唸り声をあげてこちらに向かってきた…初めて直面するこの事態に紫音は「死」を意識した。それは遠い存在と思いながらも、こんな日常のすぐ近くに潜んでいたのだ。

(このまま…死んじゃうのかな?)

(それは…嫌だ!)

(どうする?…魔眼しかない?…でも…)

(?!やるしかないっ!!)

魔導リングに意識を集中させてシールドを展開…飛び掛かってきた一匹目を防ぐ。その凶暴さと鋭い爪は今にもリングの障壁を破りそうだった。見れば後方の二匹もこちらに向かって来ていた。…三匹は防ぎ切れない…

紫音は覚悟を決めた。このままやられる位なら…やってやる!

震えは止まった…あの日の様に。

その瞳には強い決意が見えた…あの日の様に。

しかしあの日とは違う、これは…逃げる為の決意ではない…前に進む為の決意だ! 紫音は目を閉じて叫んだ。

「魔眼発動!」

ヤミノフルヨル2

「魔眼発動！」

その声に反応して紫音の周囲に風が巻き上がった。結い上げた髪は風になびきその全てを周囲に晒した……その美しい黒髪は毛先から変色してゆく……紫へと。ゆっくりと目を開ける 右の瞳だけ紫に変色していた。障壁の強度が一気に増した。

……出来ればこの力だけはいいたくなかった。彼女の人で苦しみを与え続ける紫の魔眼……正体不明過去にも前例の無い魔眼であった。属性はおろか効果 使用できる魔法など全てが謎であるり とにかく紫音にすらコントロールが出来ないのだ。全ての属性魔法が使えるかと思えば次の瞬間には全く使用出来なかったり、魔学士や魔闘士ほど強化されなかったり 未知の力が使えたりもしなかった。使用する魔法の威力も初級からマイスターレベルまで完全ランダムなのだ。

ソニックブーム
「衝撃波！！！」

リングをつけていない右手を突き出すとワイルドキャット達が見えない力によって吹き飛ばされた。……何とか成功したみたいだ。しかしながら効果はまちまちの様だ……一匹はそのまま動かなくなっているが、他の二匹は直ぐに起き上がり再び襲い掛かろうとしている。紫音は直ぐに次の行動に出る。障壁ひ解除し自らの前にリングを使い魔方阵を描く……リングの宝の輝きが軌跡となって魔方阵を形成する。

「『荊の森の王よ！我等に仇成す彼の者に戒めを！……荊の呪縛！』」
ニードルバインド

詠唱が成功し魔方陣が光の粒子になり消えてゆく……ワイルドキャットの影から黒い荊の影が現れその体を串刺しにした。と言っても本当に串刺しにする訳ではなく影によって動きを封じるのだ。気絶しているヤツには効果が無かった。残りの二匹は影に絡めとられ身動き出来ないでいた。……今のうちに安全な場所を探してここを脱出する方法を……視界の片隅で影が動いた。気絶していたワイルドキャットが立ち上がった。気付くのが一瞬遅れた為 対応が出来なかった。突然体当たりを受けてよろめいた…鋭い爪が狙いを研ぎ澄ました。

「!!……痛っ!!」

咄嗟に身体強化…速度上昇を無詠唱で発動し体を反転させた……がかわし切れず右腕を少し切り裂かれた。そのまま距離をとる……時間が^{アイス}ない。失敗は許されない…比較的得意な水…風属性混合の水^{ビック}刺を発動する。紫音の背後に氷の矢が三本現れる。ワイルドキャットが飛び掛かると同時に矢を放った。縛られていた二匹に命中…そのまま煙の様に消え去った。飛び掛かってきた一匹は更に高くジャンプしてかわした……筈だった。

「?!ニヤ?!」

ワイルドキャットの胸にはかわした筈の矢が刺さっていた。最後の矢には（追尾）の効果が付与されていた。

「この状況で失敗する訳ないでしょ」

ワイルドキャットは自らに起こった出来事を理解する間もなく消え

去った。……と 同時に紫音の髪も瞳も元の黒に戻った。

「きっかり5分ね……」

あの日……あの少年は私を救ってくれた……この得体の知れない魔眼のせいで私は酷く消耗していた。制御出来ないこの力は私の心も蝕んでいった。

とにかくこの目をどうにかしたい一心で両目を抉り出そうなどという異常な考えに至ってしまった。……うん、今はその考えが異常だと思える。

でもあの頃の私にはそうする以外に逃げ出す方法が見つからなかったのだ。

そして あの少年は教えてくれた……別な方法を！

〈間章〉キオク

「……終わったよ」

彼の声に私は目を開けた。彼は私の目の前にいて 私の肩を両手で掴んでいた……少し疲れた顔をしていた。

「大丈夫？」

「うん……思ったより君の力が凄かったんだ……もう大丈夫……とは言えないかも。」

「えっ？」

彼の言い回しに少し不安になった。そんな様子に気付いたのか彼は優しく笑って ごめん と言。

「見てごらん」

そのまま体を反転させられた 目の前には鏡に映る自分がいた。……その髪と瞳は私の嫌う紫ではなく……

「わぁっ！お母さんと同じ真っ黒だぁ！」

紫音は夢にも思わなかった自分の変貌に心踊らせた。夢では無いだろうか？ いや……夢だったら嫌だな……軽くほっぺをつねられた。

「……いひゃい」

「夢かも……とか考えてそうだったから……ごめん」

……彼は申し訳無さそうに手を離れた。でもそんな彼の心遣いが嬉しかった。私は振り返り彼の両手を握った。

「ありがとう…私…私…」

お礼を言いたいのにな涙が溢れて言葉を繋ぐ事が出来なかった。彼は私を抱き寄せて泣き止むまですっと髪を撫でていてくれた。

「…落ち着いた？」

「…うん…その…服…ごめんなさい」

彼の胸元は私の涙で染みを作っていた。……鼻水ではない！

「それから…ありがとう」

「どういたしまして…でもね…これはあくまでも一時的な方法だから…今から言う事は忘れないで。」

彼が言うには私の眼力が無くなったわけではなく 強制的に休眠状態にしているらしい。更に色々制限があった。要約すると。

・魔眼保持者から適合者扱い（魔法は使えるが自制する様に）

・使用した場合の成功率は著しく低い。（魔力の根元の眼が休眠している為）

・一時的に魔眼を発動させる事が可能…強く念じる （その場合限定的な解除の、使用時間は5分間）

・強い感情に反応して魔眼が発光する場合がある。（強い驚きや衝撃…特に怒りの感情には反応しやすい）

等々細かい指摘事項は有るものの今までの状態から考えると至って大丈夫だった。（後に色々苦勞する事は考えもしなかったのだが…）

「……うん…大丈夫…生まれ変わったつもりで頑張るよ」

紫音は小さくガッツポーズを作る。彼は笑う……うん、頑張って…と

「……私からは…あなたに何もしてあげられないけど……」

「気にしないで…君が頑張れるなら…それでいいんだ」

「でも…これは…私の感謝のしるし…」

紫音の両手が彼の頬を包み込んだ。ふつと柔らかな唇が重ねられた。それは短く重ねるだけの幼稚な口づけ……しかし紫音の感謝の気持ちと精一杯の勇気が伝わってきた。

「…い…一応私の初めて何だから感謝してよねっ」

照れ隠しにこんな事を言ってみた。彼はありがとうと言って笑った。……不意に真面目な顔付きになると

「……君の名前は？」

そういえばお互いが名乗っていない事に気付いた。

「…紫音…紫の音って書いて紫音」

「紫音か……君にピッタリのいい名前だ」

「……ありがとう」

「……僕の名前は……………」

「……………」

「うん…でもこの名前は忘れて……もしも君がこの名を覚えていた

ら……」

再び記憶が曖昧になる……彼の名前……なんだったかなあ……

ヤミノフルヨル3

Orz……紫音は暫く路上に両手をついて項垂れていた。

いくら子供とはいえなんつー……夢見る子供かつ！……いや子供だったんだけど……ね。

過去を回想するついでに自らの恥ずかしい初体験も思い出した紫音は思いつきり凹んでいた。

なんとか立ち直るとハンカチを腕の傷に巻き付けた。

……へんなバイ菌とかいないだろうな……

先程まで命の危険を感じていたが一度の戦闘が紫音の気持ちを切り替えていた。紫音は鞆を抱えると奥に向かって歩き出した。このまま此処にいても事態は進展しそうに無いし……未だに戦闘の気配が奥から感じられる。再びさっきの猫ちゃん達に出会う可能性もあったけど……私の心の声が（進め）と告げていた。

……気配が濃くなった……いるっ？！

再び鞆を抱えシールドを展開するべく構えた。前方の路地の暗闇に無数の目が輝く……その数およそ十数匹……これは流石に防げ無いなあ……

紫音は咄嗟に駆け出した。先程の戦闘で動きを見る限りそこまで足が速いとは感じなかった。……二足歩行だから？

追いついてくる奴は鞆で殴り飛ばした。……魔眼を発動させたいが一度発動させると次までは30分位時間を空けないと無理なのだ。
・発動したからといっても成功率は相変わらずなのだが……

（……さっきのファイアボールはこちらから来た筈だ。）

ワイルドキャットと敵対する者が味方になってくれると判断した行動であった。……まさか犬が相手だったなんて事は無いはず……そう信じたい。違った時は……そんなときやそんなときだわっ！

路地を突っ切った先の階段を駆け上がりその先の小さな公園を目指す。改めてこの結界の規模に驚く。このまま紫音のアパートまで帰れるんじゃないかと思ってしまっただけの広範囲だった。公園を渡り切る前に紫音は足を止めた。やはり数が多い為か逃げ切るのは不可能だった。リングの補助を受けて紫音の使える初級魔法で戦うしかない。

最初に飛び出してきた奴に感電スタンの魔法を見舞う。それを見た他のキャット達は警戒しそれ以上は飛び掛かってこなかった。

(…どうする？ここは一発逆転狙いで炎の壁で行くか……)
ファイアウォール

問題はその成功率だ。初級魔法はそこその確率で成功するが中級となるとその成功率は三割を切る。魔眼が不安定な事もあるが、紫音が頑なに魔眼の使用を避けていた為 熟練度が著しく低いのが原因でもある。しかし背に腹は変えられない！

「ええい！ファイアウォ……」

紫音が腕を突きだし魔法を行使しようとした時 周囲に爆炎の壁が巻き起こった。周りにいた何匹かのワイルドキャットが巻き込まれて消し炭になった様だ。

その規模と熱量に驚いた紫音は後退りしながらも躓いて尻餅をついた。

なななな何よこれっ?! 私っ?! 私がやったの?! 私SUG
EEEEEE!!!

「貴女大丈夫？……って紫音？！」

背後からの声に振り返った。そこには毛先に赤く燃える炎を灯したイリユージャがいた。彼女がここに居ることは驚きだったが・・・彼女もここに紛れ込んだのだろうか？それにしてもやけに落ち着いた雰囲気だった。・・・ああ・・・そうか・・・先ほどのファイアボールの主が彼女であることに気づいた。イリユが差し伸べた手によって引き起こされる。彼女も私が居たことに対して驚いているようだった。

「！？イリユ？……燃えてるっ！」

紫音は彼女の髪先に火を見つけ、慌てて彼女の毛先に燃える炎を叩いた。しかしそれは一向に消える気配を見せない。・・・とゆうか熱さを感じないのだ。

「あはは…紫音大丈夫だよ。それは私の魔力の現れ……体の一部だよ。」

「はっ？」

「……それよりも紫音……その腕……」

イリユが腕に巻かれたハンカチに気付きそう呟いた。

「あはは…さっきあいつらに……？イリユ？」

瞬間イリユを取り巻くオーラが変わったように感じた。炎の暖かさから氷の様な冷たさに……

「よくも……よくも私の可愛い紫音に傷を……！！！」

彼女を取り巻く炎が一層燃え上がる。……えっ？……私のって言った？ いやいや今はそんな事は放つといて……

イリユの身体に変化が現れた。髪は肩から先は炎となり 手首 肘 膝にも炎が燃えていた。……あれ？ イリユの耳ってあんなに長かったっけ？

極めつけはスカートの下から覗いてる……アレは何？ ふりふりゝあぁなんだ…尻尾か……尻尾？！

そこでイリユは声高らかに自分達を取り囲む妖魔の群れに向け、名乗りを上げた。

「下等な妖魔の分際で我が逆鱗に触れた事を後悔するがいい！！我が名はイリユ・シャ・ハイヴ・アリエル！ 誇り高き焰魔族最後の戦士なり！」

ヤミノフル Yorl 4

「……ふむ……こんなものかな？」

結界を張り終えたイリユーシャは一番高い雑居ビルから周囲を見下ろした。

今回召喚されたのは（ワイルドキャット）……低級妖魔だ。個体での能力は高くないが奴等の強味は群れる事だ。魔界で異常発生したワイルドキャットに村が一つ滅ぼされた……なんて話もあるくらいだ。……気配を探ると……50匹程度か……ん？……んん？……妖魔の気配に混じって違う気配を感じ取った……一般人が紛れ込んでるう？！あわわわ！マスターに怒られちゃう！

イリユーシャが妖魔と戦い始めたのは2ヶ月前。何者かにより町中のあちこちに召喚の魔方陣が書き込まれていた。それに気付いたマスターが結界で空間を隔離して人知れず処分していた。それに気付いたイリユーシャが手伝いを申し出た。

イリユーシャはそのまま空中にダイブした。彼女の周囲に炎が具現化した。（魔装）と呼ばれる魔力の鎧だ。その身体は強化されあらゆる外敵からの攻撃を半減、無効化させる。アスファルトにクレーターを作る程の衝撃で着地してもイリユーシャには何のダメージも無かった。起き上がり様に周囲のワイルドキャットにファイアボールを見舞う。一瞬で灰となり崩れ落ちて行く哀れな妖魔に一瞥をくれてやると気配の元に急いだ。

「……くそっ！こいつらキリがない！」

召喚用の魔方陣が未だに働いている為が次々と現れるワイルドキャ

ツトのせいでなかなか気配の元に辿り着けないでいた。先ほどこら感じる気配が自分の知る物に類似している事に 若干の焦りを感じていた。

（あの角を曲がれば……くそっ！）

眼前に現れた群れに後退を余儀なくされた。向こうに向かおうとしている一匹にファイアボールを放つ……くそっ！かわされた！

イリューシャの周りに殺到した妖魔を炎の剣（フレイムブレード）で両断する。 先程の逃がした妖魔に向けて三発のファイアボールを放つ。三発目は（特別製）だ。これで危険を察知して上手く逃げてくれたら良いのだが……模倣結界は私が作り出したものだが、十二使徒の魔鏡はマスターのものだから抜け出す事はまず不可能だろう。………？おっ？ 僅かな魔力の流れにイリューシャは驚いた。紛れ込んだ訪問者は戦うつもりらしい。この状況でこの機転の切り替えの早さは好感を覚えた。それは自分が戦闘種族である為か、感じる魔力が心地好いものだからなのかはわからないが………

側面から襲いかかる妖魔を再び炎の剣で切り伏せる。あちらはなんとか切り抜けてくれた様だ。どちらにしても早く救助に向かわなくては………？？

ここでイリューシャは違和感に気付いた。魔力の流れによれば……ソニックブーム……ニードルバインド……アイスピック……か……風

土 水……属性もレベルも関連性がなく出鱈目だ。属性には相性が存在する。 火は水に弱く 水は土に弱い 土は風に弱く 風は火に弱い。この流れからいくと

訪問者は最後のアイスピックの精度の高さ、魔力の濃縮率をみれば水系列に属していると推測する。 ならば土属性は成功率は限り無くゼロに近い筈だが？イリューシャ自身水系魔法は全くとって良い程成功しない………いや……まさかね………

イリユーシャが一番気になったのは二番目の魔法だった。ニードルバインド基本土属性の植物を操り敵の動きを封じるものだが……僅かに闇属性の働きを感じた。

(……しかし魔導リングの属性補助もあるから……この場合の属性感知は余り意味がないかもな)

魔導リングはあくまでも術者の補助をするアイテムだ。たとえそれが術者自身の不得意とする魔法であったとしても……

そう考えている間に訪問者に動きがあった。……こちらに向かってきてる?! ……この状況下で迂闊に動き回る事は危険きわまりないのだが……どうやらこちらが味方だと判断したらしい……
本来ならば結界内を駆け回り、敵を引き付けるのはイリユーシャの役目だったのだが……

(結果としては好都合……利用させてもらうわよ!)

訪問者のサポートをしながらその目的達成の為に動き始めた。……周囲の敵を排除し終えた頃には訪問者は広場に追い詰められていた。もとい計画通りの展開にマスターの計画かと思わず疑いたくなった。……いや、マスターと私の間には嘘や偽りはない。だから今回は恐ろしい偶然なのだ。

イリユーシャは知らなかった。これは偶然ではなく必然であったことを……

訪問者は追い詰められ、妖魔に取り囲まれていた。遠目に見ても女性だとわかった。……この魔力の感じは……いやまさか……ね。

精霊の動きが活発になる……炎の壁か……なかなか良い判断をしている。残念なのはこの魔法が失敗した事だ。術式が上手く精霊に伝

わっていない様だ。……惜しいな。

イリューシャは新たに炎の壁の術式を再構築する。訪問者の失敗した炎の壁に更に自分の炎の壁を重ねる。結果としてそれは巨大な炎の壁を作り出した。訪問者は驚き尻餅をついた。

今頃（何これ?! 私SUGEEEE!）とか思ってるのかな? そんな彼女に声をかける。

「あなた大丈夫? ……って紫音?!」

やっぱり先程感じた魔力は紫音だったのか……でも何故?

「?! イリユ? ……燃えてるっ!」

私の魔装の炎を見た紫音が慌てて髪をはたいた……かわいい奴め。

「あはは…紫音大丈夫だよ。それは私の魔力の現れ……体の一部だよ。」

「はっ?」

まあこれが普通の反応だわ…魔装なんて一般的には知られてないからね……

ふと紫音の腕に巻かれたハンカチに気がついた。

「……それよりも紫音……その腕……」

「あはは…さっきあいつらに……? イリユ?」

ハンカチに滲む血を見て自分の中には激しく渦巻く魔力の奔流に気がついた。

そう……許せないのだ!

「よくも……よくも私の可愛い紫音に傷を………!!」

怒りの感情が私を支配する。ああ……ヤバイなあ……体から漏れ出す魔力が制御できなくなり、魔装が怒りのせいで（魔身化）しているのがわかった。マスターに怒られるかなあ……紫音……きつと驚くだろうなあ……しかし 親友であるはずの彼女を傷付けられた事はイリユーシャにとっては我慢ならなかった。

「下等な妖魔の分際で我が逆鱗に触れた事を後悔するがいい!!我が名はイリユーシャ・ハイヴアリエル! 誇り高き焰魔族最後の戦士なり!」

熱い炎が体中を駆け巡る様に本能の囁きがわたしをしいする……ちからのかぎり、てきをなぎはらい、そのからだをひきさいてやれ。わがちからハむてきナリ。おそれルモノはナイ。ワガコエにシタガイソノチカラヲカイホウセヨ! メニウツルモノスベテハカイシロ! コワセ! モヤセ! コロセ!

……にげて……しおん……

押し寄せる暴力と破壊の感情に薄れゆくイリユーシャの意識の中でその言葉は彼女に届くことは無かった。

ヤミノフルヨル5

大気が震えていた。

イリユーシャから放たれる膨大な魔力は妖魔達を圧倒していた。

彼女を取り巻く炎は今や赤から青に変わりつつあった……実際に温度が上がっている訳ではないが、魔力が確実に上昇している事は間違いない。ゆっくりと起き上がったイリユーシャの顔はいつもの愛嬌を振り撒くものではなく、目の前の獲物に歓喜する獣のものだった。

瞬間、妖魔の傍にイリユーシャが移動した。そのまま長く伸びた爪で両断した。この妖魔は自らが斬られた事すら理解していないだろう……そして炎に包まれた。

状況の飲み込めない紫音は呆然と立ち尽くしていた。無理もない親友が実は魔族でしかも燃えていてさらに別人みたいに妖魔相手に虐殺の限りを尽くしているのだから。

「……イリユ……どうしちゃったの？」

「暴走だよ」

紫音の何気ない言葉に背後から答えがあった。咄嗟に振り替えると黒髪の男がイリユを見つめていた。年の頃は私と同じ位だろうか？黒のズボン、黒のタンクトップ、黒の革靴、革手袋、全身を黒一色で統一された出で立ちは息を飲むものがあった。その中でも目についてしまうのはその右肩にある剣と十字架を思わせる刺青……

そう思った瞬間、剣の柄の部分の模様が蠢き（眼）が開いた。その眼が私を見るな否や六亡星を浮かび上がらせた。

「魔導魔眼?!」

魔導魔眼……別名第三の眼とも言われる代物だ。精霊や幻獣などの上位存在との契約などにより手に入れる事が出来る「秘技」だ。非常に扱いが難しく、暴走すると宿主の魔力はおろか生命力までも根こそぎ吸い取り消滅すると言われている。

「よせ……彼女は敵ではない……」

彼の言葉に一瞬上目遣いに彼を見ると静かに閉じた。自立式のものらしい……只でさえ魔眼に魔力を供給する必要があるのに……自立式となるとその消費量はとんでもないはずだ。この男……一体……

「よく知っているな……それにお前の魔眼も興味深い……しかし今はそれよりもイリユーシャが問題だな。」

「……貴方……何者？」

魔眼について触れられた事により 紫音の警戒心は最大のものになっていた

「……そんな怖い顔すんなよ……別にどうもしねえよ……俺は……まああいつの相棒みたいなものだ。」

そう言ってイリユに向き直る。イリユーシャは逃げる妖魔を追って公園を飛び出した。その手から放たれた火球は眼前のビルの一階を吹き飛ばす程の威力だった。此処が結界の中でなければ……そう考えると恐ろしい。

既にワイルドキャットは殆どのものが焼き尽くされていた。……残されたのはまだ小さな個体……子供だった。それでもイリユーシャの炎は消える事無く彼らを追い詰める。ふと子供の頃の記憶がフラッシュバックする。

「――夕日の公園――逃げる少女――同い年の子供達にはやし立てられ――」

「――「お前の眼は――」――「悪鬼の眼――」――」

「――っ――!」

ついに見かねて飛び出していた。後ろからあの男の声が聞こえたが、そんなことはどうでも良かったこれ以上イリュウシャの暴力的な行為を見過ごせなかったのだ。それは彼女を救うためなのか・・・それとも幼い日の自分を救う為なのか――

ビルの片隅に追い詰められた一匹のキャットにイリュウシャは何の躊躇いもなく業火の火球を見舞った。その顔には歓喜に満ちた笑みすら伺えるほどだ。憐れな妖魔は痛みすら感じる事無く灰になる――
――咎だった。

加速の魔法で合間に割り込んだ紫音は妖魔を抱き抱え地面を転がった。その背後のビルで爆発が起きた。

「やめて!イリュウ!」

起き上がりながら紫音が叫ぶ・・・しかしイリュウシャからは何の返事もない。むしろ邪魔をされた事により嫌悪感を漂わせていた。再び振り上げられた手に火球が宿る――呪文詠唱破棄 意思が行動により具現化する程のレベルだ。その手のひらの炎が一瞬収縮した瞬間

紫音はその場を飛び退いた。

激しい轟音と爆風が紫音を更に吹き飛ばした。土煙の中に巨大なクレーターと無惨に崩れ落ちるビルの姿が見えた。――冗談!あんなの食らったらひとたまりもないわ!

起き上がりながら胸に抱いた子猫妖魔が震えている事に気付いた。
今は私に襲いかかる気は無い様だ・・・

先程は身の危険を感じて この妖魔の仲間の命を奪ったが……

「……生きてる……」

腕の中の温もりに自分と同じ生命の鼓動を感じた紫音は自らの判断を悔いた。自分の身を守るためとは言え 先程の妖魔も生きていた。自分と同じ命を宿していた。無差別に命を奪うイリユーシャを止めたいと願いながらも 自らの行動にもなんの違いもない……なんという偽善！その罪滅ぼしの為にこの小さな命を救おうというのか？ そうする事で自分は許されるとでも？！

「目を覚ませっ！」

その声にハツとした。思考のループに囚われてその場に立ち尽くしていた。

振り替えると紫音とイリユーシャの間にあの男が割って入る形でその右手にはファイアボールが握られていた。

苦悶の表情を見せた後そのまま握り潰した——呪文解除だ。デイスベル しかし普通はこんな出鱈目なやり方はしないのだが……

「だ…大丈夫?!」

「そんなわけないだろ…ちくしょう…やってくれるじゃないか…イリユ」

駆け寄りその手をみるが酷い火傷を負っていた。 ……私を助ける為に？

「おい…あいつを止めるから手を貸せ」

「……どうすればいいの？」

力の差は明白だが 気がつけばそう答えていた。男は一瞬意外そうな顔をして笑顔をみせた。

「……気に入ってたぜ…お前名前は？」

「紫音…宮蘭紫音」

「紫音か…良い名だ」

その台詞に一瞬身を止めた…。いや 今はそんな事はどうでもいい

「……それで何をすれば？」

「今から3分…時間を稼げ。」

そう言って 無事な左手を使い魔方陣を展開させた。それも4つそれぞれ文様が違うことから高難易度の最上位魔法を使う様だ…。まずは自分の手を治療すべきだろうに…。不思議とこの謎の男に好感が持てた、この件に関しては信頼に値する…。と。

抱いていた子妖魔をそっとおろす。迷子の子供のように不安げな目を向けてきた。

「隠れてなさい…大丈夫だから」

と微笑んだ。意味を理解したのかそのままビル影に走り去った。

「さて…私がイリュにどこまで通用するか…やってみるしかないね！」

拳に力を入れると再び彼女と対峙した。

「魔眼発動！」

ヤミノフルヨル6

「さて……お手並み拝見と行くか」

魔方陣を展開した後 呪文構築は魔導魔眼に任せて二人の戦いに目を向けた。魔力 戦闘経験 熟練度 全てにおいてイリュウが上であることは間違いないが…あの魔眼を見てしまったては期待をせずにはいられなかった。

「……………高速詠唱……！」
リーディングスベル

魔眼の発動と同時に呪文詠唱の高速化に成功した。イリュウシャと違い私は詠唱破棄など出来ない。まずその差を埋める所から始めた。立て続けに「身体強化」「属性限定強化」「身体加速」を構築した。イリュウシャはこちらの出方を伺っているのか、その顔には笑みすら見てとれる。ああそうですか……眼中にはありませんか……でもイリュウは大変な勘違いをしているよ……それを今から判らせてあげるね。

「舞え！凍える者よ！（氷水の剣…アイシクルビット）！」

移動しながら右手から呪文を打ち出した。小さな氷水の塊が弧を描きながらイリュウシャの周囲を周回する。

その回転により気温が低下し新たな氷水を生む。それがランダムของ タイミングで襲いかかる。

360度全方位からの攻撃だ。しかしイリュウシャの纏う炎の魔装

はことごとく氷水の塊を蒸発させる。一見地味に見える攻撃だが一度発動すれば自己増殖により無限の攻撃を繰り返す事が出来る。イリュウシャにはダメージを与えるまでには至らなくとも本人の性格上、かなりストレスを感じるだろう……ゆでたまごの殻を剥くのを嫌がっていたイリュウの姿を思い出す。伊達に毎朝ただ、ご飯を食べさせていた訳じゃ無いんだからね！・・・それは彼女にとってかけがえの無い幸せな時間でもあった。

やがて風ぎ払う仕草をとりはじめ遂には炎の波動で呪文自体を燃やし尽くした。イリュウシャと目が合う。

………すっごい睨まれた。

次の瞬間イリュウシャは両手を振り上げ巨大な火球を造り出していた。あれを喰らえば相手が誰であろうとただでは済まないであろう。しかし紫音はこの瞬間を待っていた。

「流れよ！満ち落ちろ！（激流…フラッド）！」

「無限の振り子よ！無限の軌跡を刻め！（夢幻振り子の結界…ペンデラムデジョン）！」

間髪空けずに待機状態で準備していた呪文を発動した。イリュウシャの頭上に大量の水が発生し彼女を呑み込んだーと同時に結界が現れ、その中に水もろともイリュウシャを閉じ込めた。彼女を中心に無数の氷の振り子が空中で衝突し更に結界の強度が増してゆく……いずれも難易度の高くない初級―中級に当たる呪文だ。しかし水の量は尋常ではなく結界の振り子も通常では4〜8とされるところが16もの振り子が結界を強化し続けていた。

「限定属性強化」

使用属性を限定する事でリスクを生み出し効果を倍増させる特殊な効果呪文だ。結界中のイリュウシャは水に吞まれているものの溺れる事もない……その火球の火力はあの量の水をも蒸発させていた。

………全て紫音の計画通りだとも知らずに……

この結界を破る事は簡単だった。

あと少しこの火球に魔力を注入すれば良いだけだ。結界を無限に強化するとは言え全ての面に強化が施される訳ではない。振り子の数には驚かされたが……それだけだ。

さあ そろそろ終わりにしよう……

憐れなこの娘の友人よ……

イリューシャが火球に魔力を注いだ。

火球が膨れあがり結界を破壊――

辺りが閃光に包まれた。

夢幻振り子の結界に亀裂が入り、激しい爆発が起こった――イリューの炎により蒸発した水は水蒸気となり結界内の高密度な空間内で膨張を続けていた。イリューが炎を強化した為、その均衡が崩れた。――水蒸気爆発。

これこそが紫音の狙っていた結果だった。その威力に結界は碎け散り、その衝撃に周囲のビルの全ての窓ガラスが雨の様に降り注いだ。

熱波と爆風が周囲を嵐の様に駆け巡り、紫音の視界を遮った。――紫音は咄嗟に両手を差し出し障壁を展開させた。と、同時に巨大な火球が彼女の障壁を碎きその左腕を掠めた。

そのまま軌道のそれた火球はビルの屋上部分を破壊すると

十二使徒の魔鏡を突き破る勢いで接触した。――数十枚の結界を碎き火球は消滅した。……双方のの異常な威力に啞然とするしかない。掠めただけでも紫音の左手は酷い火傷をおっていた。

眼前にイリユーシャが現れ首を掴まれた。……息が詰まる……そのまま吊り上げられた。

「……オノレ……ニンゲン……チョウシニノルナ……ザンネンダガ
ココマデダ」

イリユーシャは額から血を流し呼吸も乱れていた……あの爆発の中でこの程度だなんて……やっぱイリユーは凄いなあ……

薄れる意識の中で右手をイリユの頬に添えた。優しくその頬を撫でる。

勿論イリユーシャならば耐えるだろうと予測しての行動だったのだが……

血を流す友人の姿は見るに耐えないものだった……自分がそうさせたとなれば尚更だった。

紫音の瞳から涙が零れた。

「……イリユ……ごめん……ね……痛かったでしょ……」

「……ムスメ……ザンネンダッタナ……ワタシノカチダ」

「……フフツ」

その言葉に思わず微笑んだ。

「?…ナニガオカシイ」

「それもごめん……この勝負は私の勝ちだよ」

その瞬間イリユーシャが光の柱に包まれる。イリユーシャの手が緩み紫音はその場にゆっくり崩れ落ちる。

「……3分…経ったからね」

そこで意識はなくなった。

ヤミノフルヨル7

気が付くとドアの前に立っていた。何処かで見覚えのあるドアだったが……気のせいかもしれない。

（入りなさい）

そんな声が聞こえた気がした。

ゆつくりとドアノブを回し中に入った。中は円筒形の部屋になっており、中央にはドーナツ型の円卓があり、さらに中央に巨大な水晶が鎮座しており、外の様子を写し出していた。

そこにはイリユーシャと対峙する私の姿が写っていた。

先程の戦闘でも感じられたが魔眼の発動と同時に私の意識は分割されるらしい……（思考分割）と（思考加速）の二つが自動的に発動するらしい。本格的に使用したのは随分と久しぶりだったので過去もそうだったかは定かではない。戦っている私に対して指示みたいなものが出されていたのがうる覚えに思い出された……その正体がこの思考分割の様だ。

（そう……ここは思考分割により作り出された脳内世界……私たちは分割された貴女自身）

水晶の奥に二人の人物が円卓に着席していた。一人は髪の毛も服も全てが白に統一された『私』

もう一人は同じく全てが黒に統一された『私』

（座れ）

先程違い、やや高圧的な口調……黒の方だな。

取敢えず言われた様に座る。

（私は貴女の中にある保守的な思考から生み出された紫音）

（俺は攻撃的な思考から生み出された紫音）

「はあ……」

つまりこの謎の魔眼のオプションとして発動したら思考が分割され 相談役が二人用意される……と

（……やけに軽い例えだが……まちがっちゃいない）

黒紫音が呆れた様な顔をする。

あれ？喋ってないのに答えてくれた…

（私達は貴女の思考の一部ですから…考えていることは共有されています。）

成程……それで……今から何をするの？

（…作戦立てるに決まってるだろ）

（無策ではイリユーシャを三分間抑えられませんよ？）

うむむ……確かに。

（マジで無策なのかよ？……）

（その為のこの『チャットルーム』ではありませんか）

……なんか楽しそうだね。

（さあ早速ですが本題に入りましょう…基本知識を転送します。）

白紫音が目を閉じると脳内に情報が流れ込んでくる。

『チャットルーム使用規約』

・ルーム内の時間はほぼ停止状態に近い。

・三人の考えは共有される 秘匿権はオリジナルの紫音のみが保有

・論議により決定された件はオリジナルの紫音の行動に反映される。

・時間の流れは変更可能 巻き戻す事は出来ない。（決定された行動はほぼ取り消し不可）

・魔眼発動時以外でもオリジナルの紫音が望めばチャットルームに入室可能。等々……

ふむふむ…

（では、イリユーシャとの対戦については…）

（まず正面からは無理だな…動きを止める方法から考えるか？）

（黒紫音の意見には賛成です。紫音は何か考えが？）

「…うーん呪文が勝手に足止めしてくれるのは無いかな？」

（……影の捕縛者シャドーパーンダラなどはそれなりに有効かと？）

（まてまて！白紫音！その呪文は上級呪文だ。成功率に不安がある。

）

（ふむ確かに…黒紫音の言う通りでした。成功率は28%ですね）

「……………」

（うーん…まずは高速詠唱で力量差を詰めよう）

（黒紫音！それは良い考えですね）

（身体加速と身体強化も欲しい所だな。白紫音、熟練度の差をどうにか出来ないかな？）

(…そうですね…限定属性強化はいかがでしょう?)

(なるほど…リスクはあるが水系列限定にすればそのリスクもあって無いような物だな……どうした? 紫音?)

「いや…白紫音とか黒紫音とかわかりにくいから…シロンとクロンとかどお?」

(……)

(……)

「…あれ?もしかして嫌だった?」

(……紫音……今はそれ所ではないでしょう?イリユーシャを救うために有効な手段を選ばなくては……)

(そうだぜ!シロンの言う通りだ!くだらないこと言っていないでお前も考えろよ!)

(話を戻しましょう。クロンの言うようにまずは自身の強化を……)

少し嬉しくなった。いくら私自身の思考とは言えなんだか友達と話をしている錯覚にとらわれた。

クロン辺りは『べっ…別に気に入ったりしてないんだからなっ!』とか言ってくれると萌えるかもしれないけど…

(あるあ……ねーよ!私はツンデレじゃないしっ!)

「しまった!思考を共有してたんだった!」

(別に私は気に入っていますよ?)

「…この思考に関してはもう触れなくて良いです。」

この後は真面目に議論して水蒸気爆発を起こさせる方向で話をまとめた。

やがて時は動きだし、私とイリユの戦いが始まった。中央の水晶に写し出される自分の姿はまるで映画か何かを見ているみたいで…

…でも目を閉じて意識すれば戦っている自分の意識も感じられる。

巨大な爆発をみるとシロンとクロンが立ち上がった。

（私達の勝ちね…三分経過したからね…それでは紫音…またの機会に）

（じゃあな…べっ…別にこの名前を気に入ったりしてないからなっ！）

クロンが意味ありげな笑みを浮かべてそう言った。…少し萌えた。

私は立ち上がり入ってきたドアから退室する。ゆっくり目を閉じて…意識が一つに統合される。

ゆっくり目をあける。身体中が悲鳴を上げているように軋む。目の前には天空から降り注ぐ光の柱に閉じ込められたイリユーシャがいた。これなんだっけ？

セラフイムコキューション
「聖天使の光牢獄だ」

セラフイムコキューション…天界人が魔界人との戦いの為に生み出された

上級捕縛結界…魔族の体内の魔素に作用してその動きを封じる……だったかな？

背後から聞こえた声に少し体を起こした。あの男が私の側にいた。…左手の傷を癒してくれているらしい。

「応急処置だ…あまりこちらに魔力をまわせないから気休めにしかならないが…」

癒しの光…ヒールライト…どちらも光属性魔術だ…その癒しの効果が心地

よくてこのまま眠ってしまいそうになる。自分の手も酷い有り様なのに……彼がイリユーシャの『マスター』だろうか？

「……オノレ……マタキサマニシテヤラレルトハ……」

イリユーシャが呟く……でもその声は別人もモノだ。地面に横たわったままイリユを見た先程の様な殺気は感じられない。

「……コンナコムスメニシテヤラレルトハ……オマエハコノムスメニトツテモ、トクベツナソンザイラシイ……」

「……お願い……イリユを返して！」

軋む体に鞭打って体を起こした。

「……コレイジョウ、コノカラダニキズヲツケラレテハカナワンカラナ……キョウハソノムスメニメンジテヲヒコウ……シカシ、ツギハナイズ」

そう言い残すとイリユはがくりと項垂れた。からだを取り巻いていた炎も消え去りいつも通りのイリユに戻っていた。

「……大丈夫だ」

直ぐに駆け寄った彼がイリユーシャの容態を見てそう言った。

「よかった……」

その言葉を聞いて紫音は意識を手放した。

イリユーシャが気絶したことにより、いまや瓦礫と化した模倣空間の効果が切れ、光の粒子となって消えてゆく……と、同時にこの一帯を隔離していた結界を解除する。折り畳まれて行くように結界が収縮され、やがて 地面に吸い込まれる様に消え去った。

結界は現実世界にはダメージを残す事無く、その役割を十分に果たした。

視線に気付いて振り替える。建物の陰から顔を覗かせているのは 紫音が救ったあの 妖魔の子供であった。本来ならば存在を許す訳には行かないのだが……暫く考えた後背を向けた。暫く様子を見てみようと思った。あの妖魔の中に僅かだが変化を感じとれたからだ。

「……さてと」

横たわる紫音を脇に抱え、イリユーシャは肩に担いだ。

「……まるで人さらいじゃないか」

ビルのガラスに映る自身の姿を見て、そう言わずにはいられなかった。どちらにしろ 人よけの効果も切れる頃だ……こんな姿を見られたら本当に通報されかねない。

ゆびさきで印を空中に描くと 自動ドアの様に空間が割れ、その中に姿を消した。それを見つめていた妖魔だけが後に残された。

ワカクサノニワ1

あの人の部屋から物音が聞こえた気がしたので 読みかけの本に栞を挟むとドアから顔を覗かせた。中央が吹き抜けの階段になっているから上の三階にあるあの人の部屋のドアが良く見える。

……やはり微かに物音が聞こえる。時計の時刻は既に10時を過ぎていた。今夜は大したこと無い……なんて言ってた癖に……それに今夜は少し胸騒ぎがしていた。

階段をゆっくり登り、あの人の部屋のドアに耳を済ました。……微かな物音にあの人の呻く様な声が聞こえた。ノックをすると返事がかえってきたので、ドアをゆっくりと開いた。中にはイリユーシャと見知らぬ女性をベッドに横たえていた彼の姿があった。

「……ひと……さらい？」

「……やっぱりそう見えるか？」

私の言葉にあの人が笑った。自分でも同じ想像をしていたらしい。ふと視線をベッドに移した。見たことのない顔だった。制服がイリユーシャと同じ様なので……学園の知り合いだろうか？

「……誰？」

「……イリユーシャの友達だ」

「……何があった？」

第三者を巻き込むなんてらしくない。今までにない事態にそう問いかけた。そもそもイリユーシャ達がこうした戦闘行為をする事自体間違っているのだ。

「……んー実の所俺にも良くわわかんねー…説明は後ですから…先にこいつの手当てしてくれる？」

そう言って気を失っている黒髪の女性の左手を指差した。……火傷の痕……イリユーシャとケンカでもしたのだろうか？……もしかしたら彼女が噂に聞く「紫音」かもしれない。

「アイリス」

名前を呼ばれてあの人を見た。ベットからイリユーシャを担ぎ直していた。

それを見たたん 私は複雑な気分になった。

「……「手当て」？」

「……何だよ…何だか不機嫌だな。」

生まれつき感情を表に出せない私の些細な変化を感じ取ってくれた事はとても嬉しいのだが……今はそれはそれ。

「……なんでもない」

自分で出来る精一杯の嫌悪の態度を示してみた。棒読みのその台詞に一層嫌味を込めてみた。

それを見たあの人は苦笑いを浮かべて私の頭に手を乗せた。私の蒼白金の髪をそっと撫でる。私の髪は魔界でも珍しい色をしている。母が白金色、父が蒼色なので二人の良いところ取りと思っている。

「今夜は必要ない……彼女の後は俺も手当てしてくれないかな？」
「?!」

そうやって見せた右手は悲惨な有り様だった。皮膚は焼け爛れ一部は炭の様になっている。繋がっているのが不思議なくらいだ。

「……馬鹿なの？死ぬの？」

損壊具合からして優先度はこちらが先だ。使い物に成らなくなってしまう……一刻も早くこの現状を維持しないと……良く見たら「時間停止^{ストップ}」の呪文が施されていた。これならなんとかなりそうだ。

「……馬鹿では……ないみたい……」

「そうか……じゃあ頼むな」

そう言い残し あの人はいりゅうシャの部屋に向かった。

あの人はいりゅうシャの部屋を見た。……なるほど可愛らしい顔立ちをしている。いりゅうシャが最近入れ込んでいる存在だと聞く。椅子を隣に置くとその腕の治療を始めた。まずはその左手を指定範囲に認定し

「再生^{リカバリ}」を施す。淡い光が患部に溢れ、その傷を癒してゆく。その他には外傷はみられないので暫くすれば気が付くだろう。静かに立ち上がると部屋の灯りを落として階下にむかった。

あの人はいりゅうシャの部屋から出てきたあの人に出くわした。その目が紫音の容態を気にしていたので大丈夫の意味を込めて頷いた。

「……次は貴方の番」

「よろしく頼むよ」

二人揃って二階にあるオープンリビングに向かう。この建物は一風変わった様式で、円筒形の構造をしている。吹き抜けの中央は一階

から三階までを繋ぐ階段で各階にキッチン、浴室、オープンリビングを完備している。一階部分は通常の建物と変わらず、管理入室キッチン、食堂、談話室、書庫などが完備されている。

……そう、此処は学生寮なのである。と言っても寮生はまだ私を含め4人しかいない。かくいう私も昨日此処に到着したばかりなのだ。あの人とイリユーシャは面識があったがもう一人にはまだ会っていない。週末は実家に帰るらしいので顔合わせはもう少し先になるみたいだ。

オープンリビングに来るとお互いに向かい合わせにソファに座った。

「…時間停止を解除して…」

「…ん…お手柔らかに頼む」

腕を覆っていた重い空気が霧散した。すかさず「固定」^{ホールド}と「治癒再生」^{キュアリバ}を施す。淡い光が腕を包み、炭酸水のような気泡が傷を癒していた。

「…お見事」

「…その気になれば…自分で出来る筈」

「俺は雑な性格でね…元通りにはならないかもしれないからな」

そんな事は嘘に決まっている。しかしそれが私の為につかれた嘘なので内心嬉しい気持ち^イが沸き上がった。

（ああ…何度味わってもこの『嬉しい』気持ちは実に心地が良い）

私は生まれつき感情というものが解らなかった。怒りってなに？悲しいってなに？目の前に起こる事が全てであり、ただそれだけだった。赤子の頃から手のかからない子供…と思われていたみたいだが、実際は表現出来なかったただけなのだ。当然感情による涙や笑い

などとは無縁であった。原因は私の生まれに起因するものだがもうひとつはそれに伴い体内の魔素の生成異常が原因だった。

基本的に魔族は体内で魔素を生成している。人間にしてみれば酸素を取り込む事と同じだ。それぞれ個体に合った魔素を生成し循環、排出している。その配分は多くても少なくても身体に異常をきたすのだ。ましてや体内で生成出来ない事は致命的であった。

両親から近い配分の魔素を体内に送り込んでもらう事で生命活動を維持する事で精一杯だった。故に感情を表現できないでいた。但ただ、生かされているだけの存在―それがこの私、アイリス・H・ギゼルヴァルトなのだ。

ワカクサノニワ2

「……………」

目覚めると見知らぬ天井だった。体を起こすと室内にも見覚えはなかった。クローゼットと机 必要なもの以外置かれていない部屋だった。部屋の時計の音がやけに大きく聞こえた。針は11時を指していた。記憶を手繰り……ふと左手を見る。あの時受けた傷は何処にも見当たらない。魔眼を使用した後にくる倦怠感も今は綺麗に消えていた。不意にドアが開き女性が入ってきた。蒼くそして白い幻想的な色の長い髪に、魔族特有のつり上がった耳……その手にはティーカップやポット一式が載せられたトレイを持っていた。

「…気がついた？……どこか痛い？」

「だっ大丈夫です！……あの……此処は……それからイリユ……イリユーシャは………」

その女性は室内のテーブルに一式を置くと紅茶を入れ始めた。

「……此処はイリユーシャの寮……彼女は眠てる。……無事」

その言葉に紫音は胸を撫で下ろした。

慌てて女性に向き直る。

「わ……私紫音って言います、貴女が手当てしてくれたのですか？」

「……応急措置はあの人がした。私は仕上げだけ。……紅茶で良い？」

その淡々とした動作には何処か作業的な物を感じた。言葉に飾りが

ないと言うか……必要な事以外は話さないと言うか…

「……愛想悪いから……気を悪くしたらごめんなさい」

「いえっ……とんでもないです」

顔に出ていたのだろうか？彼女にそう言われて紫音は身なりを正した。そんな紫音の心を知ってか彼女は尚も続ける。

「…私は感情表現というものが無い。…簡単に言うとは病気の様なものの」

人形のような白く整った顔から語られる言葉はそれだけで美しく真実味を一層引き立てた。やはりその表情から感情を読み取る事は出来ない。

「……でも今は理解は出来る、表現は出来ないのけど………紫音も学園の生徒？」

「ええ…じゃあ貴女も？」

返事の代わりに頷いた。

「…昨日来た、通うのは来週から………自己紹介忘れてた、私は…アイリス…よろしく」

そう言って手を差し出した。つられてその手を握り返した。アイリスはそれをぶんぶんと振るとそっと離れた。

「…紫音も…友達……嬉しい」

表情こそ変化は見当たらないが、その頬に微かに赤く染まった。それを見た紫音も嬉しくなった。

「こちらこそ…よろしくね」

笑顔を見せると差し出された紅茶を受け取った。

「そういえば…あの人ってあの黒髪の男でしょ？」

「……アーガイル？」

そうか…アイツ そんな名前だったのか……いかにもオレオレっぽい感じだったしね…

「で……彼は今何を？」

まさか寝てる……なんて事は……

「……多分……管理人さんの所……それよりも……紫音……お風呂……」

アイリスは足元からタオルとガウンを取り出した。その両方に学園のエンブレムが在る事は、此処が認定された学生寮である事を表していた。

「ああ…そうね…お言葉に甘えてそうさせて貰うわ」

「……一緒に……入ってもいい？」

「えっ?……うん、いいよ」

相変わらずアイリスの表情からは感情を読み取れないが、一瞬、雰

困気が柔らかくなった気がした。

「あ……下着どうしよう…」

上はともかく、下は流石に穿かないわけには。するとアイリスが立ち上がり 大丈夫と告げた。目を閉じ、胸の前で両手を合わせる形で魔力を集めた。やがてそれは球体となり、アイリスの魔力が注がれる。それは形を取り始め……一枚の女性下着が出来上がった。それを手渡される。淡い水色の兎のバックプリントが目立つ。

「……創造魔法…パンツァークリエイト下着生成」

やり遂げたアイリスは何処か誇らしげだ……ええ…凄いです…凄いですとも…名前も凄くしつくりきますよ、魔力を物質に変換する創造魔法ってだけで凄くレアですけど……生地だって申し分ないですよ？この兎ちゃんが可愛いのは認めますが……これを私に穿けと？この手の物は随分と昔に卒業した筈の私に穿けと仰るのか？

アイリスが目眩を起こしたみたいにして椅子に座り込んだ。目を閉じてもたれ掛かっていた。

「大丈夫?!」

「……魔力使いすぎた……」

パンツにどれだけ使うんだよ……創造魔法恐るべし。特に私が出る事もなく、ただあたふたとするばかりだった。暫くするとアイリスは普通に目を開けた。

「……魔力を補給してくるから……先にお風呂入ってて…場所はここの階の向こう側のドア」

そう言うどドアを開けて出ていってしまった。……えーと……取り
敢えずお風呂に行けば良いのかな？ 管理人さんとかに挨拶とかし
なくて大丈夫だろうか？ まあなに話していいかわかんないし……
いいか……

何か体に先程の戦いの余韻が残っているみたいで早く洗い流した
い気持ちもあった。お風呂セットを抱えると部屋の外に出た。

「……うわぁ……」

その建築様式に息を飲んだ。普通の一般家庭で育った紫音からみれ
ばこの建物の構造は映画などで見る海外の ホテルの様で感動を覚
えた。 円形の廊下の脇にはそれぞれドアが3室ずつあり 正面には
オープンリビングとその横にバスルームらしいドアがあった。 中
を覗くと 大きな鏡台 洗面台 洗濯乾燥機が見えた。……更に
奥の開き戸を開けると露天風呂風の造りをした浴槽が広い空間に広
がっていた。……あれ？ 広すぎない？ このバスルームだけで
さっき部屋の倍はあるけど……確か学園にも似たような場所がある
事を思い出した。空間魔法と呼ばれるもので 中身は別の場所と繋
げられていると聞いた気がする。

「……じゃあ……早速……（＾Ｏ＾）」

衣服を脱ぎ去り洗濯乾燥機に放り込みタイマーを回す。 はやる気
持ちを落ち着かせながら浴槽へ……

「……あぁっ……生き返るっっ！」

自分のアパートのユニットバスではこんなに体を伸ばして入る事な
ど出来やしない……久しぶりに味わう解放感にただただ酔いしれて

いた。

二つの針が交差して、これから始まる紫音の長い一日の幕開けを静かに告げていた。

ワカクサノニワ3

目覚めるとベッドの中だった。自分の部屋だと認識するまで時間がかかった。……記憶を手繰り自身に起こった事を思い出して行く。

（ここに帰ってきたって事は……全部終わったって事か……）

暴走した内なる魔性が紫音と対峙した事を思いだし嫌になる……親友に対してなんて事を……暴走したとはいえ、この手にかけてやうとするなんて……一人で唸って枕に顔を埋めた。

（……そう言えば紫音はどうしたんだろう？）

アーガイルが彼女の住まいを知っている筈はないし、紫音も怪我をしていたから……此処に連れてきたと考えるのが妥当だった。一体、自分はどんな顔をして会えば良いのだろうか？

（あはは……殺しかけちゃってごめんねっ！）

………ないな………それにこんな自分をどう思うだろうか？ 故郷では化物と呼ばれ忌み嫌われていた自分の正体を見せてしまったのだ。頭を掻きむしりながらベッドを跳ね起き、室内をうろろし始める……

（……もう以前の様には出来ないかも）

そんな考えがイリューシャの気分を更に落ち込ませた。思い起こせば、紫音が転校初日にイングリッドのドS口調に困惑していた所に声をかけたのがきっかけだった。……普段ならそんな事はしない筈

なのに：マスターに救われこの世界にやって来たが、自分の存在意義を見いだせずにいた日々が続いていた。八つ当たりの始めた彼との討伐も紫音と出会ってから気持ちに変化が現れていた。

——守りたい。

紫音やクラスメイトのいるこの世界をこの学園を：

私の力は破壊してしまうものだけど……それでも私はこの瞬間を守りたいと願った。しかし……

「…駄目だなあ…私は……」

再びベッドにダイブすると同時に何処からか悲鳴らしきものが聞こえた。

「?! 紫音!」

イリユーシャは飛び起きると部屋を飛び出し声の主の元に向かうのだった。

ワカクサノニワ4

「お風呂〜お風呂〜♪」

アイリスは軽快に階段を駆け上がり自室の部屋に飛び込んだ。直ぐにクローゼットから着替えを取り出す。紫音との入浴の為だ。

誰かとお風呂に入るなんて随分と久しぶりだ。アイリスの二人の姉も今は多忙の為にゆっくり過ごせる時間は少ない。それでも自分に会いに来てくれるだけで嬉しかった。しかし今回はまた別の楽しみなのだ。家族以外との入浴など初めての経験だったのだ。

「……紫音驚くかなあ？」

今の自分を見て。魔素を補給したアイリスは先程の物静かな面影はなく躍動感に溢れていた。

アイリスは自分をよく携帯電話みたいだと思う。

今の自分が充電直後の

（全ての機能が使える状態）

時間の経過と共に魔素を消費して行き

行動に制限がかかり始める状態……

（電池残量が不足しています）

魔素を激しく消費し貧血のようになる自分……やがては命を落としかねない。

（充電してください……ピー）

電源の切れた携帯電話は豊富にある手段で充電すれば再び復活するが、

私は魔素が尽きると死んでしまう。もうひとつはアイリスの充電手段は限りなく少ない事だ。

もしもその方法を間違えれば激しい拒絶反応で生死の境をさ迷いか

ねない。

着替えを抱えると、部屋を飛び出し廊下の先にある浴室に駆け込む、同時に衣服を脱ぎ去ると浴室の引き戸を思い切り……………

「紫音お待たせー!!」

……………開け放った。

が 紫音の姿は無かった。

「……………あれっ？」

目の前には檜の香りが漂う和風の浴槽が在るだけだった。

……………あれ？何だろうこの違和感は？

私は間違はなく二階の自分の部屋から此处に来了。……………廊下の向かい側のこの浴室に。

……………紫音にもちゃんと伝えた。廊下の向かい側にある浴室の場所を……………あの人の部屋で……………?!……………三階にあるあの部屋で!!

違和感の正体に気付いたと同時に紫音悲鳴が聞こえて来了。

ワカクサノニワ5

「……………」

「……………」

なんで紫音が此処にいるんだろう？
それも……裸で……いや、自分も裸なんだが。

自分は浴槽の引き戸を開け放ったままの格好で……
彼女は浴槽から立ち上がったままの格好で……

「……………」

「……………」

いやあああああ……………

……………5分前に遡る……………

「……………疲れた」

部屋に戻ると紫音の姿は無かった。

ああ……アイリスと一緒に風呂に入ると喜んでいたな……

そのままベッドに倒れ込む。いつもの自分の布団の匂いと 柔ら

かな甘い香りがした。先程まで此処に眠っていた紫音の事を思い出した。

(……………いい)

はっ！？ イカンイカン……………何を妄想しているんだ！

身体を起こすと大きく伸びをした。ふとガラスに映る自分の姿が目についた。長い銀の髪……………それは先程までのアーガイルの黒髪ではない。アイリスに魔素を移植する為に本来の姿に戻っていた。

カイル…アルヴァレル

それが彼の本当の、しかし偽りの姿。

しかし…彼女を巻き込むつもりは無かったのだが……………何でも無いって訳には行かないだろうしなあ……………

彼女の力には興味があるが、こんな事に巻き込んではいけない存在だ。出来れば今後も変わらない平穏な日々を送って欲しいのだが……………

実習の時の様に

メモリーロスト 記憶消去を使うには経過時間が経ちすぎているし、内容も強烈過ぎて消せない割合の方が高い。そしてなにより

紫音への影響が懸念される。

「……………こんな時にはさっぱりするか……………」

ドアから出ると浴室に向かった。

廊下を歩いていると 下の階の廊下をアイリスが走って行くのが見えた。

普段なら感情が読み取り辛いのだが……………

今の彼女は全身で喜びを表しているのが一目で解るほどだ。

脱衣所に入ると衣服を脱ぎ去り引き戸を開いた。

疲れていたからか……不思議に思わなかったんだ……洗濯機が動いていた事に。

「……アイリス遅いな……逆上せちゃうよ……」

湯槽でぐったりとした表情で紫音は呟いた。……いかん……このままでは溺れてしまいそうだ……ここはひとつシャワーでも浴びて……

ふらふらと湯槽から立ち上がるのと入り口のドアが開かれたのは、ほぼ同時だった。

「……………」

「……………」

アイリスが来たのかと思ったが何か違うようだ。……アイリスではない見覚えのある顔……！！

カイル…アルヴァレル！！何で此処に？！……とゆうか、何故に裸っΣ（ノム>）！！

…いや、風呂なんだから当然か……

まてまて！紫音！何を納得しちゃって……てゆうか何処を見ようとしているのよっ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！見ちゃダメだ！……カイルは何を見てるの？

彼の視線を辿ると……私自身にたどり着いた。……あっ……あ

ああああああああ？！

「……………いつ……………」

「……………いつ？……………」

そして、私は力の限り叫ぶのだった。

ワカクサノニワ6

叫び終わった後、足元がおぼつかなくなった。

ああ……やっぱり長湯しすぎたなあ……

……何かを叫びこちらに向かって来るカイルを見たのを最後に意識を失った。

さっきから気絶してばかりだな……私

「……おっ……おいっ！」

叫んだ紫音はそのまま糸の切れた人形の様に湯舟に沈んでいった。慌てて飛び込み 寸前で抱き抱えた。

ちくしょう！……目のやり場に困るじゃないかっ！
下を見る
な下を見るなー！！！！

取り敢えず脱衣所に………柔らかいな……

！？いかんっ！考えるな考えるな！

えーとえーと

ブランク定数のCODATAの 推奨値はh $\parallel$ 6. 626 06
9 57 (29) $\times 1$ ……h: エッチだと?……いや! これは
事故だ! それにこれは救命行為であり、柔らかいけど、やまし
い事は何も無い!

………肌が密着し過ぎなんだよおおおお !!
すべすべじゃ

んかあー！

何とか脱衣所まで運ぶとタオルを巻き付けたが、色々と目に焼き付いてしまった。……………不可抗力だ。

……………でも

あああああ……………俺いろいろと駄目かも

いや大丈夫だ。ここは防音だから聞こえてはいない筈、まずは服を着てからなに食わぬ顔で無かった事にすれば……………

ズボンに手をかけた所で激しくドアを開け放ち、イリュとアイリスが踏み込んできた。そうか……………魔族って耳がいいもんな……………いや関心してる場合じゃねえか……………何でアイリスまで裸何だよ！

「……………お前達ちようど良かった……………何をしたの?」……………」

俺の言葉はイリューシャのやけに凄味の効いた言葉に遮られた。

「……………いやこれは……………「変態」……………」

弁解の言葉もアイリスに両断された。

いかな……………誤解されている…………………………まあ無理もないけど

「……………これはだな、風呂に入ろうとしたら何故か紫音が入浴しててだな……………」

俺は悪くない!……………しかし言い訳したらしく弁解しつつ、こそこそとズボンを履く姿は……………なんか泣けてくるな……………

「?!……………紫音の身体を自由を奪い、あんな事やこんな事をつ!」

……俺の話は聞いてくれて無かったですね（TOT）

イリユーシャとアイリスの魔力が跳ね上がった………逃げるが勝ちだな。

（空間跳躍）で室外に転移しようとしたのも束の間室内の色が失われ、白と黒のモノクロに染まる。

「!?（ラプラス）！てめえ！」

この空間のみ 外部と遮断されてしまっていた。
イリユ達の魔力を感知した この建物を管理する存在ラプラスが被害を最小にする為の手段を実行したのだ。

しかもイリユーシャとアイリスはそれぞれ火球ファイアボールと氷球アイスボールを発動中だ……何で魔族は直ぐにキレて魔法をぶっ放したがるのかね……イリユはともかく、アイリスは見た目は父親には似てないが、性格は似ているのかも知れないな……

自らに迫る危機にも関わらず、そんな呑気な事を考えている。
この程度何て事は無いのだが……自分の足元には気絶したままの紫音がいる。

……やれやれ… あいつらそんな事したら紫音まで危険だとわからないのかね？

回避する為に紫音を抱き上げ様と手を伸ばした……

その肩に手が触れた瞬間 紫音が目を開けた。

「…よう、気がつ…」「この変態!」

突き出された掌が見事に顎を捕らえ、カイルの脳を揺らした。それだけに留まらず、蹴り上げられた右足が股間に決まった。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

流石のカイルも護るべき対象からの攻撃は予想外だった様で 男性
としてはどうする事も出来ないこの痛みに悶絶するのだった。

「……厄日だ…」

そう言い残し前のめりに紫音に倒れこんだ。

「やっ…ちよっとっ!」

のしかかられてジタバタする紫音を見て、イリユーシャとアイリスは我に返った。

「…カイルっ!!」

慌てて駆け寄るが見事なまでのコンボ攻撃は、カイルの意識を見事に刈り取っていた。

「カイル…カイル……死なないで!!」

ポロポロと涙を溢すアイリス……………いや…死にませんから。

周囲の風景が色を取り戻す……（ラプラス）が安全性を認識して、
周囲との遮断を解除した。……と、同時に脱衣所の扉がゆっくりと

開かれて一人の女性が仁王立ちしていた。

イリユーシャとは違う柔らかい印象の赤毛は毛先がくるんくるんにカールしており、そのピンクのネグリジェと良く似合っていた。

「……この寮では健全な性行為以外はみとめませんよっ！」

管理人 アイリシアであった。

ワカクサノニワフ

……前略お母さん。

私は今何故か正座させられています。

イリュとアイリスも一緒です。

目の前のソファーにはカイルが顎を冷やしています。その隣でアイリスアさんが笑顔なんだけど……笑顔なんだけど、決して笑ってはいません……怖いです。

「あのね、使い物にならなくなったらどうするの？」

……どうするのでしょうか？

「困る」

「悲しい」

「……わかりません」

イリュ、アイリス、私の意見だ。

「それにこんな夜更けに大騒ぎして……変態変態と連呼して、通報されたらどうするの？」

「困る」

「悲しい」

「……すみません」

「……まあいいわ……皆怪我也無かった事だし……」

「……俺は？」

「あのね、カイルちゃん、良い思いしたんだからそれくらいは我慢

して当然と思うのだけど……ねっ？」

何故かこちらを見るアイリシアさん……見ないで……（TOT）
制服は洗濯してしまったものだから、代わりに大きなYシャツを着ている。これはアイリスが貸してくれた。

ふとカイルと目が合い何となく気まずい雰囲気になる……とゆうか恥ずかしい。

「…それと、あんた達！直ぐに魔法を使わないの！キレたらポンポン爆破してるから魔族はアホの子だって思われるのよ？」

立ち上がるとイリュとアイリスの頭をぺしぺしと叩いた。

「…でも…お姉ちゃん…」

「…アイリス…貴女にとって魔力は命そのもののよ？痴漢退治に半分も魔力を使ったりしたら駄目でしょ？」

「……痴漢じゃねえよ…」

「……姉妹なの？」

「いや、こちらの世界でって意味で」

「…お前ら、本っ当に人の話聞かないのな」

カイルは弁解は無理と察してそのまま黙りこんだ。

「…さて、えーと紫音だっけ？あんた今日は泊まっていきな」

「えっ…はい…良いんですか？」

「良いものにも、こんな夜更けに帰らせる訳にもいかないしなあ…
なあカイル？」

「……何で俺に振るんだよ」

「べっつにくきししし」

アイリシアが意味ありげに笑う 隣のアイリスが カイルが泊めてくれる様にお願いたんだよ と教えてくれた。

……うん、素直に感謝しておこう。

「…まあ折角だからね、さて布団の用意でもするかね」
「……私も手伝う」

ソファアールから立ち上がったアイリシアを追ってアイリスも廊下に向かった。

「紫音…私の部屋で眠りなよ」

イリュが話しかけて来たが……何かよそよそしいな……気にしてるのかな？

「…うん…イリュは大丈夫？」

「ああ……その…紫音さっきは…」

「私は気にしてないから。」

らしくないので先に言ってやった。

「あ、でも私の眼の事は皆には内緒にしといてね。」

「…うん…出来れば私の事も内密に頼む」

「…わかった…お互いの秘密を共有するなんて…でも、親友だからいいか」

「…そうだな、紫音なら」

お互い顔を見合せて笑った。

「…ついでに俺の事も内密に頼む」

「……わかったわ……覗きの件は忘れてあげる（//ω//）」

「ああ助か…ちげーよ！てか覗きじゃねえし！Σ（ノド>）」

いたずらっぽくいった言葉に見事に見事にボケてきた……こいつ…ノリツツコミ上手いな…

氷を脇に置くと私の正面で膝に肘を付けて両手を組むと真っ直ぐにその澄んだ蒼眼でこちらを見つめてきた。白銀の長髪がはらりと…しなだれる…初めてまともに見たけど…こいつ…イケメンだっ！

………？……ふと違和感を感じた。

学園でも彼を間近で見た気がする…その髪は白銀だっただろうか？その瞳は蒼眼？駄目だ駄目だ！本能が警鐘を鳴らしている。これ以上踏み込むと戻れなくなる―と。

その答えが喉元から出かかっていたその時 彼…カイルが不適に口許を歪めた。

「…わかった、その件については忘れなくて良い……記念に覚えておこう。……お互いにな」

「はっ？……あ……あああ……あああああああっ?!」

お互いに……そう、私としても忘れる事が出来ない位に見ちゃったけど……私だって見られちゃってるのよね……

「じゃあ、そうゆう事で」

「ちよっ…待った待った！わかったから……あああああっ！」

引き留めようと立ち上がると、慣れない正座なんてしてたものだから、足が痺れてそのまま彼の方に倒れこんだ。

「おっと…」

カイルが上手く支えてくれた。……なんか近いな……さっきの事を思い出して、つい赤面する。そんな私の耳に彼はこう囁いた。

「…危なかったな…イリュにウサギのぽんつぁーが丸見えになる所だったな」

はっ？ て、ゆうか、何であんたが知ってるの？！

感謝の言葉を述べる代わりに、右手を振り上げこう言った。

「この…変態っ！」

夜の廊下に小気味良い音が響き渡った。

ワカクサノニワ8

朝になった様だ……

やはり見知らぬ天井だった。

私はイリユーシャのベッドで眠っていた。そのイリユーシャは床に敷かれた布団の上で、少し残念な格好で寝ていた。

……アイリスがいない。

昨晚、イリユに抱き枕の様に抱き締められたままうなされていた筈だが……

ふと、窓の外からの音に気がついた。

イリユを起こさぬ様にそつと窓際に近付くと、庭の光景が一面に広がった。

若草の庭

広い庭は一面の薄緑の若草が朝日を浴びて輝いていた。その奥の庭木の先には塀があり、その先は海が広がっている光景はまるで違う世界の様な印象を与えた。

その中央に二人の人物が見えた。

一人はベンチに座る蒼銀髪……アイリスと その視線の先……一人何かの構えをくねくねやってる変態……カイルだ。

……あ、くしゃみした。

不意にこちらを見上げると 目があった。

（…お前、また変な事考えただろ）

……と、その目が物語っていた。

その後アイリスもこちらに気付いて、何かを掌からふうっと吹く

様な仕草をすると、小さな光がこちらにやって来た。窓をすり抜けて来たそれは、小さなウサギの形になり紫音にメッセージを伝える。

(…紫音もおいでよ。着替えはそこにあるよ)

そう言うと、光が弾ける様に消え去った。

(伝言の精霊) 気軽に任意の相手にメッセージを遅れる事から S
MS (精霊メッセージサービス) とも言われているとかいないとか
……。

指定された場所にあるジーンズとTシャツ…… 広げてみると、先ほどのメッセージを伝えたウサギの姿があった。

(…これ…下着にもついてた奴だよね?)

ウサギ大好きJK……みたいなイメージが定着しそうで少し気が滅入った。

まあいいか…

急いで着替えたら イリュを起こさぬ様に そつと部屋を出た。

階段を降りると正面の玄関から外に出た。正面の正門からの階段は上品な

白い石が敷き詰められており、建物も西洋の城を彷彿させるデザインであった。

右手の生垣の端に柵があり、その奥に向かって道が続いていた。

アーチ状の庭木のトンネルを潜ると、先程見た 庭に出た。その先に二人の姿が見えた。

「…おはよう紫音……此処に」

私に気付いたアイリスが ベンチをポンポンと叩いた。

「おはよ…早起きだね」

促されて座る私に紅茶が差し出された。……昨晚、アイリスに渡された物と同じ香りがした。

「ありがと…オレンジペコ？」

「…当り…詳しい？」

「いや…母がこの銘柄をよく飲んでいたから…」

体が温まると同時に懐かしい気持ちが溢れた。

「…何してたの？」

「…カイル…見てた」

その視線の先にはカイルがいた。何か拳法みたいな組手？らしき動きをしていた。

凄い、無駄な動きは一切無くの確に急所を打ち抜いている。こっ…この構えはっ?! まさかも

…嘘です。拳法なんて知りません。この動きが凄いのかどうなのか私には解りません。

「…何だ…もう起きたのか」

練習らしきものを終えたカイルがこちらに向かって来た。アイリスがタオルと飲み物を渡す。…良く気が利く娘だなあ。

「サンキュ」

カイルはそれらを受けとり汗を拭った……昨日から思ったけど……こいつイケメンだなあ。

「……お前ウサギ好きなJKなのな」

そう言って少し意味ありげに笑う。

……前言撤回。こいつ……性格の悪いイケメンだ。

「……さて……シャワーでも浴びるかな……覗きに来るなよ?」

「行くかつ! あんたと一緒にすんな!」

私の応えに声をあげて笑いながらカイルは歩いて行く……ペースが狂わされっぱなしだ……

「……二人供……仲良し」

「?! はっ? いやいや……そんな訳無いから……」

心なしかアイリスが不機嫌に見えた。

……なんで?

「……私の髪……ホントは翠色だったの」

お母さんと同じ色……と、付け加えた。

長い間治療や投薬を続けた結果、髪の色が変色してしまったらしい。

「……ずっと病室と自分の部屋の往復だった……だから……庭が欲しかったの……自分だけの庭が……」

感情表現が苦手と言っていたが……とても良い顔をしていた。……体調が良いのかな? 昨夜より顔色も良いし……なによりその言葉に力強さを感じる。

「…初めて、此処に来たとき、カイルが言ってくれたの
(アイリス、此処は君の若草の庭だよ) って」

「…良かったね」

アイリスの表情から、彼女がどれだけ嬉しいを感じたのが良く解った。

その反面、その感情を喜びとして 感じる事が出来ないなんて……

「…感情を持たない私が……可哀しいでしょ？でも、あの時確かに胸が凄く温かったの…昨日、紫音が友達になってくれるって言うてくれた時も温かくなった」

「…アイリス…それは私も同じだよ」

「…いつか…この私の病気が治ったら……皆と笑ったり、泣いたり、
沢山…遊びたい」

「…うん、一緒に遊ぼう」

紫音にはその日がそう遠くない気がした。

ハジメテノアサ

「……………」

アイリスと二人食堂に入るとそこはダイニングキッチンとリビングが一緒になった広い空間だった。上品な六人掛けのテーブルの上には豪華な料理が所狭しと並んでいた。

「ほらほら、紫音も早く座りなよ」

私達を呼びに来たイリユは既にテーブルに着席していた。いつの間……

友人の家で朝食をとるなんて初めての出来事に紫音は内心、楽しみで仕方なかった。

「やっと来たか…アリ姉！揃ったぞ！」

ダイニングキッチンから出てきたカイルが手にしたサラダをテーブルに置くとイリユの対面に座った。

その隣にアイリスが座ったので私はイリユの隣に着席した。

「よっ」

と、キッチンの奥の大きな冷蔵庫のドアをお尻で器用に閉めるとグラスと赤ワインを手にしたアイリシアが上座に座った。そのワインをグラスに注ぐと姿勢を正して宣言した。

「じゃあ…いただきますっ！」

威勢良く手を合わせるとグラスの中身を一気に煽った。

「くうく効つくう！」

…いやいやワインはもう少し味わって飲むものじゃあ…まあいいか 早速目の前のスクランブルエッグを口に運ぶ…うわあ…美味しいなあこれ

「紫うおん食べてりゅ？遠るうおしないで食べいなもよ！」

口一杯に頬張りながらイリュが謎の言葉を発した、その口元はハムスター並みに膨れていた…彼女に憧れる男子が見たらドン引き間違いないな…

「…イリュ…下品」

アイリスはナイフとフォークを上手く使い分けて皿の上の蒟蒻を綺麗に口に運んで…蒟蒻？！

アイリスの様な西洋風の可憐なお嬢様がナイフとフォークで蒟蒻を酢醤油でお召し上がる姿はちょっとレアなのかも知れない…いや、その食べ方もどうかと…

「仕方ないだろ、（手当て）して貰えなかったし…魔力を補充するには食べないと…」

箸をくわえたまま上目使いにカイルを見た。

「……自業自得」

何も言わぬカイルに代わり、アイリスが答えた。

「…あん？」

「…危険な事に首を突っ込むべきではないわ」

二人の間に何やら険悪なムードが漂った…馴れない雰囲気にあたふたしてしまう…

「ほらほらイリュ、そんな怖い顔してたら紫音が怖がってご飯食べられないでしょ？」

「…ふ…ふあい」

見ればアイリシアがフォークに突き刺したフランクフルトでイリュの頬をぐりぐりと突いていた。

「ほらアイリスも食べなさい」

そう言って目の前のイチゴジャムをスプーンで救いとると器用にもアイリスの蒟蒻の上に投げ落とした。

「ふぁ?!…蒟蒻…」

感情を出せない筈の彼女からとても残念な気配がした。

「食事の時間は楽しくするものだ!」

と、笑いながら再びグラスのワインを飲み干した。

「…でも、アイリシアさんは料理がお上手なんですネ」

場の雰囲気と和ませるために、話題を変えようと話を振ってみた。
瞬間、空気が凍りついた。……あれっ？なんで？

「…ぶ…ぶははーっ！紫音この凶暴なアリ姉が料理なんか出来るわけ無いじゃない！そもそもこのアリ…ぐぶっ」

「…ああっ？！イリュ…誰が凶暴だって？」

笑うイリュに一層フランクフルトを押し付けるアイリシア……この人には逆らわないでおこう。……紫音はそう思うのだった。

「ふっ…がっ…痛いわー！！」

「！！ああっ！私のビッグマグナムがっ！」

イリュが反撃に転じてフランクフルトをかじり強引に飲み込んだ。

「…最後の…最後のお楽しみだったのに……イリュユーシヤッ
！」

二人して部屋を走り回り追いかけてっこが始まる…あたふたとアイリスに助けを求める為に視線を向けると 何故か恍惚の表情を浮かべていた。何処か遠くを見る目で (ふう…)と、溜め息をついた。

「…アイリス？」

「……………見つけた……至高の味」

……えっ？食べたの？ あなイチゴジャム蒟蒻を……まあ…アイリスが幸せならそれでいいか……どうすれば良いんだろ、この状況……カイルと目が合った。

「……何事も無かったかの様に食べる」

……どうやらそれがこの寮での正しい食事のマナーらしい。

……それは無理だろ……

小さく溜め息をついて食べ掛けのサラダを口に運んだ。 ああ……このドレッシング美味しいなあ……

友達宅で食べる初めての朝食はなんとも言えない思い出となって紫音の記憶に刻まれるのだった。

カノジョノジジョウ1

食後、紫音とイリユーシャは二人で片付けをしていた。

恩返し…とは大袈裟だが、紫音なりの感謝として何かせずにはいられなかった。なので普段もやっている皿洗いをすることにした。ちなみにイリユは隣で皿を拭いている。

「えっ？ご飯ってカイルが作ってたの？」

イリユから聞いた事実に危うく皿を落としそうになる……意外だ。

「マスター…カイルは昔レストランで働いた事があるって言った。」
「

「へえ…ところでそのマスターって何？」

「…マスターは…マスターだよ」

イリユにしては何か歯切れの悪い返事を返してきた。

「…ふふふっそれはね…御主人様と肉奴隷の関係なのよっ！

毎晩毎晩あんな事やこんな事をっ！！！」

「教育的指導っ！」

突然現れたアイリシアの爆弾発言に これまた廊下から現れたカイルが手にしていた新聞紙でその頭を叩いた。

「もう…思いきり叩く事ないじゃない！癖になったらどうすんのよ！責任とってよねっ！」

「はいはい…」

二人のやり取りを見ながら隣のイリュに視線を向けると耳まで真っ赤にして俯いていた

。……何だろな〜二人供アイリシアさんの発言を肯定も否定もしてなかったなあ……

「どちらにしても、巻き込んだんだから事情の説明くらいしてあげたら？」

「……これ以上は巻き込むつもりは無い、全て忘れて元の生活に戻るのが一番だ」

ソファアに座ると話は終わりと言わんばかりに新聞を広げた。

……全て忘れる？…昨日の夜の出来事を？この忌まわしき魔眼をイリュの為に使う決意をした事も？妖魔達の命をこの手で刈り取った事も？

「…嫌…嫌だよ！忘れるなんて出来ない！」

普段の紫音からは想像が出来ない様な声でテーブルを叩いた。そんな彼女をカイルは刺す様な視線で見つめた。意思の強さを表す様にそれを真っ向から見つめ返した。

「……ついてこい」

やれやれといった様子で新聞をたたむと廊下に出た。紫音は慌ててついてゆく。イリュとアイリシアも続いた。

廊下を渡りきりその先に長い廊下があった。突き当たりの扉を開くと、そこは道場の様な場所だった。

先に歩いていたカイルは中程で振り返り紫音が来るのを待っていた。

「…先ずはお前の力が見たい」

その言葉に一瞬躊躇ったが、この都市に来た理由を思い出し 室内に足を踏み入れた。イリュ達は室外から見物する様だ。

私が此処に来た理由―

―此処は魔眼の楽園なのか？―

それを確かめる為ならば……

私は自ら封印したこの魔眼すら受け入れよう！

「…貴方に手加減は必要ないわね」

「そうだな…全力で来い」

以前の様な躊躇いは無かった。

私を試すと言うなら試すが良い。

私は貴方を利用して貰う、私と私の魔眼の力を確かめる為の実験をさせて貰うっ！

「…しっかりと痺れさせてあげるんだからっ！魔眼発動！」

カノジョノジジョウ2

思考が分割された事を確認するや否や、紫音はチャットルームに飛び込んだ。

「シロン！クロン！力を貸して！」

シロンはリクライニングチェアで読書をしていた。私に気が付くと本を閉じて円卓に着席した。

「べっ…別にあんたなんか待ってたりしないんだからねっ！」

ツンデレな発言と共にゲームをしていたクロンはデータをセーブもせずに電源を落とすと同じ様に着席した。あれは確か（最後の幻想13）今度貸して貰お

「状況は把握している…結果から言ったら勝ち目は無いな」

「いや、シロンやってみないと解らないぞ？確かにあいつは未知数な部分が多いが、それはこちらも同じだろう？」

「…あのね、勝たなくてもいいの…私の持ってるこの魔眼の力を試したいの」

「…試すと言っても…まあやってみるだけでしょうか…」

やれやれといった感じにシロンが机の上のノートパソコンを開いた。クロンはデスクトップのPCで同じく操作を開始した。

「取り敢えず使えそうな魔法をググってみる」

「えっ？…脳内なのに光ファイバー?!」

「いやいや…（魔導検索…ググル）よ…この世界の何処かにある

（魔導クラウド）のデータベースにアクセスしてあらゆる魔法の情報を検索出来るのよ…紫音は考えた事無い？ある日魔眼が使える様になった者が何の知識も無く突然魔法が使えるなんて…不自然でしょ？」

言われてみれば…魔導リングの補助があるとは言え、魔法自体を教わった訳ではない。魔法授業も使い方や理論を習う事はあっても、その詠唱や発動方法を習う事はない。何故なら皆知っているからだ。

「…そうだな…この世界で解りやすく言う…ネット通販みたいなものか」

「…amazonとか？」

amazonは業界最大のネット通販会社だ、マスコットキャラの猫のアニヤ蔵は女子高生に人気がある…らしい

「ユーザー（魔眼）がネット（魔導クラウド）にアクセスして商品（魔法）を使用する…使い方はオンラインマニュアルで何時でも閲覧可能だ…そのやり取りを無意識のうちにやっているから、本人達に自覚は無いけどね」

「普通は魔眼…魔法みたいなイメージが強いから魔導クラウドの存在を知る者は少ないが…それでも個人がアクセス出来るのはごく一部だ、自分の属性に係る部分のみだ」

クロンの説明に違和感を感じた。属性…魔眼色が一般的だが…私の魔眼は一体どの属性だろうか？

「私達は無属性…本来はあり得ない事だけど…今は制限されてる部分もあるけど…全属性にアクセス可能よ」

私の疑問にシロンが答えた……ああ意識が共有出来るんだっけか

「いわゆるスーパーハカーだな」

………何かカッコイイ………かも？

「組合せ次第では無理なものもあるが……単発魔法ならほぼ制限は無い」

「…あと、一部指定禁止項目はアクセス出来ないからな」

「…禁止項目…なんか18禁的な？」

「違う違う……俗に言う（禁呪）と（古代魔法）だ…これらは十分に扱える者が少ないからな…世界にダメージを与えるか、使用者がダメージを受けるか…又はその両方か…」

「…だから禁止な訳ね」

私の言葉に二人が頷く……でも、そんなに危険なら魔導クラウドから削除出来ないのかな？

「無理だ」

私の疑問にまたもやシロンが速攻で答える……只の独り言だったんだけど……

「そもそも魔導クラウド自体が個人の所有物なのだ」

「…全ての魔眼の頂点…全にして個、個にして全、原始の魔眼（魔導王の秘宝…パンドラオブエンペラー）」

……お母さん…何だか凄いのが出てきましたよ？ それって偉いの？
じゃあその人に削除してもらえば……

「…まだ覚醒していないのだ」

……つまり皆、よそのうちの本棚から勝手に本を借りて読んでいるって事？

「…微妙な例えだが…：あながち間違いではないな」

「…一度使用した魔法には対価として個人の魔力が支払われる、これが魔法に対する消費魔力だ…：何度も使用していると熟練度が上がり、無詠唱や消費魔力の軽減が発生する 集められた魔力はそのまま魔導クラウドの運用に使用される、アクセスによる魔力供給はほぼ無限大だ」

つまり利用するほどクラウドは発展して さらに常連さんには特典サービスがあるって事だね

「…まあそんなものだ」

私の例えにシロンが微妙な顔をした…：例え方悪かったかな？

「…悪くない例えだ、それに紫音は理解が早くて助かる」

「じゃあ、そろそろ本題に入るか」

クロンの提示したプランがp cのデスクトップに表示される……：クロンらしくて攻撃的で面白い

じゃあ、やってみますか。

カノジョノジジョウ3

チャットルームでのやり取りが私の思考としてフィードバックされる。

リーディングスベル
「高速詠唱！」

まずはお決まりのこの呪文……授業でも使うから無詠唱で使える強化系シリーズの一つだ。続けて（属性耐性…レジストエレメント）を発動…これからが本番だ。

紫音が戦闘体制に入ったのを確認して、ラプラスに合図を送った。周囲の風景が波紋を打った様に歪み、無限に広がる荒野に変わった。

「この方が気兼ね無く力を出せるだろ？」

周囲の変化に驚く紫音にそう告げた。

「…気遣いどうも…」

やや皮肉めいた返事で返された。
相当力入ってるな……

そう思った瞬間　紫音が動いた。

「……雨の銃弾！」
レインバレット

高速詠唱で繰り出されたのは水系攻撃呪文だった。超高压で圧縮された無数の水の弾丸が 正面から襲いかかった。

カイルは体を捻り着弾点をかわしてゆく……

（…追い込む気か…）

その軌道から 自分が追い込まれていると知りながら、紫音の力を見たいが為にあえてその誘いに乗っていた。

「氷結突槍！」
アイシクルスピア

カイルの着地先から無数の氷の槍が突き出てきた。しかしカイルはそれらを掻い潜り、片腕で着地すると両足の回転を利用して、その全てを粉碎した。

安全圏に脱出したと思ったのも束の間、目の前を真空の刃が掠めていった……真空刃だ。
エアロスラッシュ

「おおっ！あぶねー」

と 言ったもののまだまだ余裕だった。
が 紫音を見るとそこに姿は無かった。

「まだまだこれからよ」

背後から声がした 振り返ると右手を降り下ろす紫音が見えた…

…この移動速度……（瞬雷）か？
咄嗟に両腕でガードするが……

サイクロンボール
「暴風球！」

紫音の手に握られていた魔導球が解放された

凄まじい衝撃が体内を駆け巡る…体内に発生した乱気流のせいで、肺の中の酸素が吐き出され上手く呼吸が出来ないでいた…悲鳴を上げる体を踏ん張り弾き飛ばされる事だけは耐えきった。

しかしそのダメージは深刻でその場から身動きする事が出来なかった。

（…なかなかやってくれるっ！）

次が来る前に回避を……

しかし、それは間に合わなかった

気が付くと既に両足は地面より現れた鎖に絡め取られていた。

ガイアチェーン
「大地の鎖」

呪文の発動と共に無数の鎖が地面から現れカイルの体に巻き付き、その自由を奪い去った。この連帯感ある攻撃はあらかじめ緻密に計画されたものだと思信する……？！

頭上に巨大な氷塊が現れる……押し潰す気かっ？！カイルは慌てて防御の為の………氷塊が溶け始め滝のように降り注いだ。

（何なんだこの攻撃は！？）

気が付けば紫音は距離を取っていた

……！？…まさか！！

「…時間だよ…言ったでしょ？痺れさせてあげるって！」

カイルの周囲に魔方陣が現れる……時限式のトラップ魔方陣だ……

「…やられたな」

魔方陣が輝き雷が迸る。

スパークワールド
(放電結界)

微弱な電気を放電し、相手の動きを封じる初歩の魔法だった。

しかし、全身水浸し、体は金属でがんに絡め…今のカイルには防ぐ手立ては無かった。

激しい雷光が迸り彼の体を容赦無く蹂躪した。

歯を食い縛り悲鳴を上げない事が唯一の抵抗だった。

ひかりが収まり彼を縛る鎖が砂となって消え去った。

カイルは静かに地面に倒れこむのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1363v/>

魔眼の使徒

2011年11月13日21時53分発行